

第 4 回

円山動物園リスタート委員会

会 議 録

第4回 円山動物園リスタート委員会

- 1 日 時 平成18年9月20日(水) 14:00から17:00
- 2 場 所 メルパルク札幌(札幌市中央区南1条西27丁目1-10)
- 3 出席者 委 員:大谷薫、岡田典子、きくち美由紀、小宮輝之、斉藤英昭、高木晴光、服部信吾、原はるみ、原田昭、山本光子、笠康三郎

事務局:円山動物園園長、種の保存担当部長、管理課長、飼育課長 ほか

4 議 事

- (1) 議題抽出と改善策について
- (2) 構想案の策定に向けて
- (3) 次回議題と日程調整

1. 開 会

原田委員長 第4回円山動物園リスタート委員会を始めさせていただきます。

委員の皆様、それから、きょうは傍聴席にも大分たくさんの方々がお見えのようですが、どうぞよろしくお願ひいたします。

第1回、第2回までは問題、課題の抽出と改善策について、それから、第3回では私の方から一つのイメージを提示させていただきましたが、本日は、今までの経緯を含めて動物園側でおまとめいただいたものと、円山動物園からの提案ということで新しい視点が提示されるようございますので、どうぞよろしくお願ひしたいと思ひます。

きょうは、17時までで一応閉会しまして、その後、初めての懇親会を開催いたします。これからまだ先がございますので、このような会議の席でなかなかうまくコミュニケーションできないということも含めて、後半の作業へつなげていく機会にもいたしたいと思ひております。

最初に、きょうの欠席、遅参委員の確認と資料の確認について、園長からお願ひしたいと思ひます。

金澤園長 本日欠席の連絡をいただいているのは、大川委員、きくち委員、小林委員の3名でございます。それから、大谷委員と斉藤委員と山本委員から、遅参する旨のご連絡をいただいております。

ただいま大谷委員が見えられました。

そういうことで、会議は成立しております。

それから、資料の確認でございますが、資料1、2、3、4までと、「SAPPORP MARUYAMA Z00」と書かれた参考資料があります。

もしお手元に漏れがございましたら、お知らせいただければと思ひます。

2. 議 事

原田委員長 それでは、早速、きょうの議題に入らせていただきます。

まず、議題(1)は課題の抽出と改善策についてでございます。

資料1、2、3の順に従って、金澤園長より説明をお願いします。

金澤園長 それでは、資料の説明をさせていただきます。

資料1は、毎回お渡ししているものですが、第3回までのいろいろ発言いただいた部分を盛り込んだものがございます。だんだん議論が煮詰まっているかなと思ひながらも、皆様に資料として提出させていただいております。きょうは、これについての説明は省略させていただきますたいと思ひます。

それから、資料2ですが、リスタート委員会の議論は議論としまして、動物園の中で飼育に携わっている飼育員がどうしたらいいかという視点から見た案を提案させていただきますたいと思ひております。これで、第3回までの議論と動物園の飼育員がどう見ているかと

いうところをお出しして、議論をさせていただきたいと思っております。

実は、この提案に携わった飼育員がきょうの夜の懇親会にも参加します。そういう意味では、委員の皆様には飼育員と直接会話していただいて、どう思うのかというところも酌んでいただければありがたいと思っております。

それでは、提案を説明させていただきます。

まず、1ページの基本理念は、もともと資料1にあるままでございますので、飛ばさせていただきます。

2ページは、実際に現在の動物を飼育しながらどういった点を改善したらいいかという視点で整理したものでございます。

1の改善点の現獣舎というのは、現在の獣舎をどうしたらいいかという視点です。ここに5点挙げておりまして、その一つは、今の獣舎はほとんどコンクリートでできておりますので、それを土なり緑の自然に近づける方法をとりたいということが挙げられています。

2点目は、獣舎が狭いということです。そのために動物が動かないということもあるだろうということで、動物に動きを出すために少し広くした方がいい、また、広く見える工夫が必要だということが挙げられています。

3点目は、物理的にも精神的にも距離感が離れて見えるということです。熱帯獣舎のガラス張りのところは、それこそガラス一枚ですから近づいて見えるのですが、それ以外のところはみんな距離感があるということから、動物との楽しみ感が少ない。そういった距離感をどう改善するか。ある種、施設の改善なり触れ合い、体験を充実していくという改善の仕方もあるのではないかと。これは、物理的な部分と精神的な部分がみんな含まれておりますが、そういうところがございまして。

それから、来園者と動物との触れ合いなりを通して感動を共感できるところがちょっと足りない。何となく来て、見た、さわったというくらいの感じがするので、そこをどうにか改善できないか。

5点目は、飼育員側の話になりますが、飼育員が作業をするスペースが狭い。古い建物ですから、どうしてもそういうところにしわ寄せがきているので、そういうところを改善したい。

それから、ソフトの方では、やはり展示のコンセプトがはっきりしていないので、これを何とかしたいということです。言葉が悪いのですが、あいているところに思いつきで建てた状態がずっと続いてきていますから、そういうところを何とか整理したいということです。

それから、これは個人的なというか、飼育員の精神的な部分になりますが、生きがいを感じられる仕事が欲しい。

それから、動物の基本アイテムということで、動物がいて、施設設備がきちんとできて、動物を見せたり触れ合いをさせたりというプログラムがしっかりできていなければこれからの動物園はやっていけないという視点での改善点でございます。

次は、動物園の役割ということで、今まで議論されているレクリエーションや環境教育といった視点でございます。

もう一点は、大人が楽しくすごせる場所や時間が欲しいという視点です。

あとは、動物科学館や動物センターという施設をいかに有効活用して普及啓発するかということです。

また、ほかの動物園とのネットワークや役割分担や連携というところを整理したい、そういうことによってそれぞれの機能がカバーされて、逆に円山動物園のよさも出ていくかなという議論です。

それから、議論の中にもありますが、産学官連携の拡充というところがございます。

それから、新たに市民なり、動物園側が求めて、動物園はこんなものがないよねということが3のところに書いていますが、コンセプト、役割、使命等を明確にした動物園と。第3回でも提案がありましたが、園内のゾーニング化を図るような視点が欲しい。

それから、ご存じかもしれませんが、動物園の東斜面に円山川がありまして、そこに野生復帰のゾーンを新設する。また、これも議論があったところですが、北海道ゾーンのようなところをつくっていけないか。そして、野生復帰と北海道ゾーンの整合性をうまくとれるようにできないか。

それから、3番目としては、触れ合いによく使われている子ども動物園は、「みんなのドキドキ体験」ということで今やっております。全部で28くらいのメニューがございますが、全国的な統計がないので何とも言えないのですが、全国で一番多く触れ合いのメニューを出しているのではないかと思います。そういうふうに、触れ合いや体験を通じて来園者の満足度を高めることができないか。

4としては、動物等の選択と集中ということです。

広い獣舎が欲しいということになると、動物園内では、園路を狭くするか、動物の獣舎を重層化して2階建てや3階建てにするということしか物理的にはできません。敷地に22ヘクタールという限界がありますので、その中で緑を確保して、来園者が休憩する場所も確保してとなると、どこかで譲り合うか、いじめ合うかしなければカバーできないというところから、場合によっては動物を整理しなければならない。整理しなければならないというのは、コンセプトをはっきりさせた上で、ブリーディングで借りているものはお返しできるだろうか、あるいは、高齢動物をどうやって飼育していくか、そういう仕掛けをすることによって展示する部分との違いを出せるのではないかとこの視点でございます。

選択と集中の考え方については、3ページ目にあらあら書いておりまして、この中では、哺乳類、鳥類、昆虫、植物全部を対象にせざるを得ないだろうという視点で入れております。

そして、選択と集中をするときには一定の判断基準が必要になりますが、ここではそれをものさしと表現しております。(1)から(9)まで、気がつく範囲でざっと整理したところが載せられておりますが、そういった視点もきっと必要になるだろうと思って検討し

ております。

4ページ目は、基本理念や意識改革といったくりで、議論の中であったことを整理しております。こういう中では、基本理念のところでは、リスタート委員会の中でも議論されていることがそのままここにはね返っているかなと思っています。

その中でも、上から四つ目の項目に、円山流で回りに流されないように独自の展示の検討ということで、円山方式というものをつくれないうかということが基本理念の根底にあるのかなと思っています。

それから、意識改革のところでは、我々動物園にいる職員がしっかり意識改革をして、市民サービス、来園者サービスの向上が図れるようにしていかなければ、これからの動物園は成り立たないだろうという前提で整理されております。

その中には、マイナーな話で、職員に特化した話もございますが、体質が古い、むだが多い、園全体に気が回っていない、マネジメントがしっかりしていないということが挙げられております。

それから、展示のところは、動物園の入り口に顔をつくって、動物園に来たというワクワク感を出そうというところから始まりまして、そこでいろいろ議論されております。実は、これもリスタート委員会で議論されているような話が結構盛り込まれております。

ただ、この中で、絶対的な展示の方法としては、動物の生態や動物にストレスをかけない飼育、展示方法をしっかり確立しなければ、今後、動物園は成り立たないという考え方のもとに整理されております。この中では、第3回でもありましたけれども、地域別のゾーンの考え方や、北海道ゾーンをつくるという視点もきっちり入れさせていただいております。

この中にはいろいろ書かれておりますが、結構おもしろいところもありまして、これから取り組みのしようがあるかなと思っています。

5ページの方は、集客やボランティアその他ということでいろいろ書かせていただいております。この辺は、今までの議論の中で出ている部分だと思っています。

それで、5ページの下の方に、展示基本コンセプトというものがございます。

考え方としましては、まず下の四角の方ですが、フィールドとして大きく四つに区切らせていただきました。一つは、北海道ゾーンと、熱帯、温帯、寒帯という地域分けをしたゾーニングですね。それから、自然体験なり触れ合いができる体験のゾーンと、それに基本アイテムというくりがあって、その上に環境というところをしっかりと重ねていこうという考え方です。

ですから、円柱の下段は、動物がすごしやすい環境づくりです。2段目は、お客様がくつろぎ、近くで見られる環境を言っております。3段目は、通り過ぎるだけではなく、体験できるということです。前回もありましたが、通過型ではなくて、滞留型の動物園を目指すということです。最終的に、環境や命の大切さを学べる環境教育を念頭に置いて柱立てをしていったら、基本的な動物園のつくりになるのではないかなというのが職員の考え

方です。

それを平面的にイメージしたのが6ページ目でございます。単純に中央の丸いところに再生円山動物園と書いてありますが、ここには寒帯、温帯、熱帯、北海道ゾーン、それから、前にもありました野生動物の復帰ゾーン、そのほかに昆虫、植物というものがあって、それがそれぞれ上の方であれば環境教育、別な視点で見れば学べる動物園という位置づけになりますし、右の方に行けば、動物研究、生命教育、自然学習というくりです。それから、レクリエーションという機能がもともと動物園にございますので、それをとらえた場合に、市民から見ると楽しい動物園です。

そして、左の方にいくと、自然保護、野生復帰、種の保存ということで、市民が求めるものとしてある役立つ動物園というくりになります。そして、この四つの機能をお互いに結びつけていくことが可能で、そうすることで、一番上にあります私の動物園という意識を持つことが可能になるのではないかという前提でございます。

7ページ以降に、各獣舎ごとに議論しました。どうしても飼育担当をしていますから、自分のところを担当はどうしたらいいという気持ちを結構入れ込んでありますけれども、ここはちょっと省略させていただきまして、16ページをごらんいただきたいと思います。

この絵は、私がかいたものなので、非常に見づらくております。イメージを何となくわかっていただけるかなという程度でしかかいていませんので、詳細はこうであるというところまでは至っておりません。

この略図4というのは、熱帯動物館の中の草食動物をイメージしております。太い線を引いて網目になっているところは、キリン、カバ、マレーバク、シマウマ、ダチョウの5種類ですけれども、中の寝るところというか室内側の飼育舎は現状のままとしても、表の部分を少し広げられないか、あわせて、ミニサファリのように垣根をなくしてお互いの動物が行き来するようにできないかということです。例えば、キリンは結構長い距離を走るものですから、行ったり来たりしてもいいくらいのもですね。我々飼育担当の中では、これはけんかはしないだろうというくりなのですが、そういったところをくくってみてはどうか。ミニサファリくらいの規模で、最終的には熱帯獣舎の建てかえを目指すわけですが、建てかえに行くまでの間、暫定的な使い方としてこういうことも不可能ではないと考えております。

そして、次の新しいところに行っても、こういう考え方ができれば、一つの場合をほかの動物で共有し合うという仕掛けができて、かえって広い面積を使えるようになるのかなという発想でございます。

それから、17ページは、下の方に配置図がありまして、アムールトラとライオンが隣合わせにおります。ところが、17ページの一番上は現状をイメージしていますが、人の方から見ると掘り込みがありまして、ここの掘り込みは4メートルくらいありますから、ライオンやトラが飛び出てこない高さになっています。しかも、冬期間、雪があっても大丈夫かなという高さでつくっております。こういう掘り込みのあるところにライオンがい

まして、感覚的に言うと、人からライオンなりトラを見たときにすごく離れて見えるわけです。これを、そこの図にありますように、掘り込みを埋めてしまって、逆にガラスの塀を立てるという考え方です。そうすると、ガラス1枚ですから動物に近づいて見ることができる。そして、埋め戻したところにライオンなりトラの休憩場所をうまくつくれば、人がすごく近い距離を出せます。先ほど一番最初に申し上げました獣舎を改善したらどうかというところを視点に入ると、こういうつくり方も不可能ではありません。これだと、当面、新しい獣舎を移転改築しなくても対応できる仕掛けという考え方でございます。

あとは、いろいろな略図がございますが、そこは説明を省略させていただこうと思います。結構大ざっぱに書いておりますので、議論は結構細かくやっていたのですが、私がかいたこんなもので我慢していただきたいと思います。

こんな議論をした上で、先ほど申し上げたような6ページの基本イメージを引き出したところがございます。そして、コンセプトとしては、5ページにある環境教育ということを中心に打ち出して、北海道ゾーンとかいろいろゾーニングをした上で、そこに環境教育で命の大切さということを学べる動物園を目指すのが望ましいのではないかというのが、今回、飼育員が集まって議論した話でございます。

簡単ですが、資料2についての説明は終わらせていただきたいと思います。

それから、資料3ですが、これは前回、本当に速報でお話しさせていただいた市民アンケートでございます。ことしの7月から8月にかけて、札幌市民の無作為抽出で1万人に郵送によるアンケートを行っております。

1万人のうち4,460人ということで、44.6%回収されました。ここでは、六つのテーマについて市民に問いかけをした中の一つに動物園がございます。この動物園のアンケートを、来月発表になると思いますが、そこで使われるデータのうち、私どもは動物園にかかわる速報値を整理しておりますので、そこのお話をさせていただきたいと思います。

裏側の円グラフを見ていただきたいと思います。

これは、前回もお話しさせていただきましたが、一番左上は、動物園の必要性です。いろいろ書かれておりますが、欠かせない存在だと思ふ、あった方がいいと思ふを合わせて約90%ということで、9割の方に賛同をいただいております。それから、必要ない、それほど必要とは思わないというのが6%ということで、市民の大多数には動物園の必要性が認められているのかなと思います。

必要な理由としましては、その右隣になります。情操教育が59%、憩いの場が25%、環境教育が14%、希少動物の繁殖が約1%ということで、今まで議論されてきたようなことが市民アンケートの結果からも出ているところでございます。

それから、必要ないという方では、これは6%の中の集計ですけれども、やはり税金を使ってまでやらなくてもいいのではないか、おもしろくないから、かわいそうだからというところがあります。必要ないという6%の中の84%の方が、こういった理由から必要ないと判断されているということでございます。

それから、中段左側の複数回答と書いてあるところですが、これは、どういう魅力アップの方法なら動物園に来やすくなりますかという問いです。これは、複数回答ですからデータとしてはもっとたくさんあるのですが、動物の展示方法の工夫をしてほしい、老朽化した施設を整備してほしい、イベント系の充実、珍しい動物を展示してほしい、売店などほかの共益施設を整備してほしいということが書かれております。

それから、その右隣は定休日を問い合わせたものですが、今は、ご存じのとおり、1年のうち年末の3日間しかお休みしておりません。それ以外、他の動物園は週1回という定休日があって、その中で施設の整理をしながらやっているものですから、そういうことが可能かどうかという整理で問い合わせをしてみました。年間を通して週1回の定休日ならいいのではないかとというのが27%で、月1回は31%、夏は休んだらだめ、冬なら週1回休んでもいいよというのが19%です。そして、現状のまま、無休でやりましょうというのが17%という割合になっております。

それから、その下の社会的役割ということで、これも複数回答ですが、これからどういった役割が求められるだろうということ。一番多いのは動物を通じた命の教育の22%で、憩いの場が20%、総合学習、学校教育との関係で出てくるのが19%、野生復帰が16%、環境教育も12%ということで、大体今まで議論されているような傾向値になっているのではないかと考えています。

あとは、駐車場や年間パスといった料金関係のところを質問したのが、一番下の小さい円グラフの三つになります。

これが、4,400人の市民から意見を聞いた結果になります。

資料1、2、3の説明については以上でございます。

原田委員長 ありがとうございます。

資料としては膨大な量になっておりますけれども、簡潔にご説明をいただきました。

まず、今ご説明いただいた内容についてご質問、ご意見等をお伺いしたいと思います。その前に、前回、小宮上野動物園長はドイツの動物園に行かれたということで、トピックスもお持ち返りのようでございますので、まず小宮委員からご発言いただきたいと思いません。

小宮委員 毎年、世界動物園水族館協会の総会がどこかでありまして、去年はニューヨークだったのですが、ことしはドイツでありました。やはり、一番大きな議題は、野生生物の保全に動物園がどうかかわるかということで、特に3年くらい前から、両生類が非常に勢いで絶滅しています。脊椎動物の中で一番環境の変化に弱くて、地球温暖化や砂漠化で、ある地域にしかないような両生類がどんどん絶滅しているようで、これに関して動物園がどういう手伝いができるかということが結構話題になりました。

また、日本のオオサンショウウオについて広島から発表がありました。これは、広島の動物園が飼育での繁殖、野生での復帰や保全の仕事をしていまして、もう長い年月やっていますけれども、その発表が非常に好評でした。

なぜそういうことを申し上げたかといいますと、3回の議論を見ていまして、動物園は楽しくなければ動物園ではないと。僕もそう思っていますし、実際にドイツの動物園は結構楽しかったです。しかし、野生生物の保全にかかわりを持った上でレジャー的要素も持つことが大事で、例えば広島がオオサンショウウオを熱心にやっているということは、動物園のステータスになるのです。反対に、レジャー部門というか、おもしろさだけを追及したようなところは、実際に20年くらい前にヨーロッパで、動物をちゃんと扱っていないではないかという市民運動によって廃止になった動物園が結構あります。それから、今度の会議でも、インドで、保全などに取り組んでいないような動物園を国として整理統合して、300くらいあった動物園が3分の2になったという発表がありました。

ですから、これからの動物園は、楽しい面と同時に、まじめな部分を持っていないとやっていけないのだなと感じました。

もう一つは、フランクフルトの動物園に行ったのですが、ゾウがいなかったのです。私が30年前に行ったときはゾウがいました。また、去年、ニューヨークのブロンクスに行ったときも、ゾウ舎がラクダになっていました。今、ヨーロッパやアメリカの動物園は、ゾウは1頭で飼うべきではないという考え方になってきています。これは、動物の福祉という面もありますし、1頭では繁殖しないわけです。それから、もともとゾウは群れの動物ですから、群れで飼わないと社会性などを保てず、1頭で飼っていて事故などを起こすことも結構あるわけです。例えばドイツですと、フランクフルトのゾウはハンブルクへ行っています。6頭以上で飼えるところにみんな集めているのです。ですから、実はアメリカやヨーロッパでは、ゾウのいない動物園がすごくふえています。ただし、ゾウの数はふえているのです。

こういう流れは多かれ少なかれ日本にも来ると思いますし、ハナコが60歳で気になるのですけれども、ハナコの後にもし輸入するとしても、今、環境省は雄、雌でしか認めないのです。繁殖目的でしか輸入できません。輸出する方もそうです。ですから、雄も入れるということになると、今のところでは飼えないと思います。

それから、世界の流れからいえば、6頭が最低だということで、日本ではなかなかできないのですが、次のゾウをやるのだったら、相当な覚悟が必要ではないかという気がしました。

先ほど、動物の整理ということで、どういう動物を飼って、どういう動物をやめるかという話が出ていましたけれども、後でそのことも含めてお話ししたいと思います。

以上です。

原田委員長 ありがとうございます。

生物保全といいますか、生物多様性の保全というものが、今、世界的にも話題になっていて、動物園のこれからの基本的な理念あるいは方針に強く盛り込まれているという現状をお話しいただきました。

それでは、委員の皆様から、ただいまの園長の説明と小宮委員のお話等につきましてご

意見をいただきたいと思っています。

笠委員 質問ですが、2ページの改善点に産学官連携の拡充という項目があります。動物園の場合、学は北大や酪農大学がありますけれども、産というのはどういうものをイメージしているのですか。

金澤園長 産というのは、これからいろいろスポンサーを募ってやっていって、前から議論されている動物園の自主財源化を何とか図れるようにということをイメージしています。スポンサーとの連携をイメージしております。

笠委員 動物関係の業界というわけではないのですね。

金澤園長 そうではないです。逆に、看板を売りますとか、ゾウ舎を建てる時に何かゾウ舎という会社の名前が入ってもいいとか、そういった連携ができないかどう考え方です。

笠委員 学についても、北大や酪農大との何らかの交流はあるのですか。

金澤園長 今の時点では、北大、酪農大、帯広は道内の獣医学科を持っていますので、そういったところとの連携はそれなりにあります。ただ、今、そのネットワークをもっとよくしたいなと思っています。正直言いまして、野生界にいる動物を研究したいとなったら、道内であれば動物園しかないのです。ほかのところに行って、鳥などはいても、本当に研究したいと思ったら動物園しかないわけですから、そういうときに連携できたり、また、それぞれの動物にもいろいろな病気があるわけですから、そういう研究をするときに、連携できるところを今きちっと整備して、そういう連携ができるようにしていかなければ、これからは成り立たないのかなと思います。

例えば、今回、参考資料としてお出ししておりますが、野生動物の復帰ということで、オオムラサキのプログラムとオオワシのプログラムを発表しました。ああいうものも、昆虫の権威の方がたくさんいますし、それは大学とも連携してかなければなりません。しかし、それらを活動させるときにどこかが資金を出さなければならぬわけですが、それが最後まで動物園がやるのではなくて、企業とタイアップできれば、そういうところからも出していただけます。

例えば、昆虫というのは次の年にふ化することは不可能ではないのですが、オオワシを自然界で飛ばすとなると、すごいプロセスがあります。生まれたときから動物園の小さなケージの中で飼育されていると、飛ぶ力がないわけです。それを、トレーニングさせたりするには長い時間がかかりますし、そこには大学などの協力もあるけれども、一方では資金面でのサポートが必要になりますので、そういったところも目指したいと。

そういうところから、今回、産学官連携と書かせていただきました。本当はその横に市民も入れてあるのですが、それをきっちりやっていきたいと思っています。

笠委員 ありがとうございます。

服部委員 私の方から補足させていただきます。

今の産学官連携の拡充の問題で、これは1回目からずっと話が出ていたと思っています

が、今、動物園の中のお土産品を一つとらえても、円山動物園らしいグッズは皆無と言っていいほどです。ですから、グッズの開発についても、産学官の連携、官までいけるかどうかは別としても、産の力をかりるべきだろうと思います。例えばお土産品のお菓子類にしても、ちょっとしたスナック菓子についても、円山動物園らしいものが必要なのではないかと思います。また、いろいろなイメージをしていくためにはデザインも起こしていかなければいけないわけですが、商品開発のレベルでも産学官連携も大きな要因を占めていくのではないかと、あるいは果たす役割が強いのではないかと、そういったものも強化していくべきだろうと思います。

これは、端的にすぐやれる事業だと思っておりますし、私も動物園の中のお土産品を見ても、買いたいな、立ちどまりたいなというイメージがわかないで、どこに行ってもあるようなぬいぐるみだらけという状況がありますので、ここは強くしていく必要があるだろうと思います。

笠委員 最近、北大がそういうグッズをやたらつくってしまっていて、ハムやソーセージは飛ぶように売っていて、生産が追いつかないという話です。それから、キーホルダーにしても倒れたポプラを使ってつくるとか、そういうことも含めて北大らしさが出ています。それは、北大の校章を貸し出す形で、質の高い土産物をつくるというのを一つの売り物にしています。もう売店もできてしまっていて、その店員は学生のバイトがやっているそうです。それが観光客には非常に受けているようなので、あれは北大らしさを一つの売り物にしたのかなと思います。

服部委員 円山動物園というのは、札幌発のお土産品をつくり得るのではないかと思います。今、お菓子業界の中でも、札幌発のお土産品をつくらうという機運も出ているようですし、その中に円山動物園が絡める要素はたくさんあるだろうと思っています。

大谷委員 産学官連携のことで、経済的な産学官連携というものもありだとは思いますが、それだけに限らず、コマースリズムに走らずに、もっと知的なとか、人材面での連携ということもあわせて考えられた方がいいと思います。たった産学官連携という5文字ですけれども、もっともっと深い議論が必要なのところではないかと思います。

それから、資料のことでもうちょっとお伺いしたいのですが、このアンケート結果は、クロス集計とか、回答者の層別に出される予定はあるのですか。

金澤園長 きょうは速報値で出していますので、まだクロスはしていません。最終的にはクロス集計まで出す予定です。

大谷委員 1万人というすごく大規模で、回収率は四十何%とかなり高率なので、このままだともったいないと思います。その中でも、いやしの20%というのはかなり大きな数字だと思いますので、例えばこれを望んでいるのがどういう年齢の人たちか、ここにヒントがいっぱいあるような気がします。

原田委員長 今のアンケートについてですけれども、このページの右下の複数回答の社会的役割と必要な理由というところは非常におもしろいデータだなと見ています。この複

数回答の方の読み方をちょっと変えてみますと、動物を通じて命の教育が22%、それから北海道にちなんだ動物の繁殖、野生復帰が16%、それから環境教育、啓発活動の充実が12%、これを合わせると50%なのです。複数ではありますけれどもね。それで、必要な理由のところを見ますと、自然環境保護や命の大切さを学べる環境教育の場だからというのが14%となっているわけです。この二つをどう読めばいいかというあたりは、クロスなどをして少しきちんと読んでみたらいいのではないかと思います。

必要な理由だけで見ますと、環境教育は14%で、情操教育の場だからというのが約60%と圧倒的に多くなっていますけれども、先ほど言いましたように、社会的役割という点ではこういうような見方が非常にウエートを占めているなと読めるわけです。ですから、この委員会で最終的にどういうふうに読めばいいのかというあたりの態度ははっきりさせておいた方がいいと思います。

あとは、これはかなり項目があるので一個一個やっていくのは大変なのですが...
....

高木委員 資料2の二ページの改善点というところにある飼育員らしい仕事、生きがいを感じられる仕事というのは、具体的に何かおっしゃっている方がいたのでしょうか。これは、何ごとにも関連してきそうなのですが、この辺のところでは具体的なものが何かあったのでしょうか。

金澤園長 これは、具体的には出ていないのです。要は、しっかり生きがいを感じられる職場にしてほしいという趣旨で書かれていたものです。それを書いた人に聞いた結果、特に何かあるということではないということでした。

岡田委員 円山の飼育員の方は、希望してなった方ばかりではないのですか。

金澤園長 札幌市の飼育員は、飼育員職というものに向かって試験を受けて入ってくるわけではないのです。現業部分をまとめて、例えば清掃のごみの収集、学校の用務員、今はなくなりましたバスの運転手、地下鉄の車掌さん、そういった人をまとめて現業職という枠の採用試験で入ってきた中で、異動で動物園が好きだからずっといるという感じなのです。ですから、初めから飼育員になりたいくて試験を受けて入ってきた者ではないのです。どこの動物園もこれに近いものがあると思いますが、今、それを専門職というか、飼育員になりたいという形にできないかという話があります。

岡田委員 一度異動で来たら、そのままずっと飼育員で継続してやるわけですか。

金澤園長 動物園にずっといたいということになりますし、やはり嫌いだということなら別な職種に異動していきます。

笠委員 大体の皆さんは長いのですか。

金澤園長 大体長いです。ことし異動してきた人もいますけれども、大体10年、20年選手が多いです。今、飼育員が20人いますが、その半数は10年、20年という方々です。

原田委員長 動物を世話したいとか、飼いたいとか、動物園で働きたいとか、そういう

ふうにはっきりした目的を持っていらっしゃる方もだんだん多くなってきているのではないかと思います。昔よりも生き物に対する関心は非常に高くなっておりますので、そういう意味で、この構想案の中に一言、飼育員の選び方ですね。そういう項目を入れられてもいいかなと思います。

金澤園長 実は、1回目に資料としてお出しした行政監査の報告の中にも、それに似たことが書かれています。後で議論になりますが、資料4のどういうフレームでいくかというところでは、そこに触れていこうと思っています。

笠委員 最近入ってきた人も、やはり現業職の中から入ってきてということですか。

金澤園長 そうです。飼育員だけの職種がないです。

笠委員 でも、それをねらって、例えば大学の獣医学部を出た人が応募してくるということはないのですか。

金澤園長 それはできないのです。というのは、現業職の受験資格は高卒以下と決まっています。だから、今言われたように、獣医師を採用したいとしたら、札幌市の場合は衛生職という職種があって、その中に獣医とか環境問題を扱うような職種がありますから、その中に獣医さんとして採用されます。そうすると、ほかの異動と全く同じになってしまうので、必ずしも動物園にその獣医さんが来るとは限りません。動物管理センターに行ったり、別なところで衛生検査をやったりということになります。

高木委員 それは、獣医師という職種に限らず、採用方法の条例みたいなものを特別に上程していくようなことはできないのですか。この職種に限っての面接試験みたいなものを特別化していくことはできないのですか。

金澤園長 不可能ではないと思いますが、ハードルはすごく高いです。なぜかという、獣医師を動物園に全部入れたとしても、20人の職場です。

高木委員 動物といっても、野生動物もいれば、熱帯動物もいれば、いろいろ興味の幅がある人がいる中で、動物園職といえますか、動物園を運営するための職員を広く募集する制度をつくれないのでしょうか。今の市の制度では無理なのでしょうか。

金澤園長 それが、さっき言っていた飼育員を専門職化するということなのです。飼育員を専門職化しますと、今、動物園にかかわっているのは全部で40人です。その中で飼育員が20人ですから、生涯ともに、もし20歳で採用されて、60歳の定年まで40年間、20人で構成された社会ができるということです。

高木委員 それはわかりますけれども、それプラス人事的なものも市全体の中で改めて、動物園職につきたい人を公募して、面接採用をして異動すると。もちろん、組織ですから、適不適がある中でまた転勤をさせるとか、かなり職種として特別なものがあると思うのです。職員をうまく選択、選別する方法も必要な気がするのですけれども、それは市の職員制度の中ではとても難しいのですね。

金澤園長 今の時点ですぐにやれますという話には全然ならないです。

山本委員 カテゴリーが相当違いますけれども、美術館のキュレーターも美術館の中で

めぐっていきますね。飼育というのも、動物の心がわかるとかいろいろなことを考えて専門度が必要だとすれば、北海道の動物園の中で回るとかね。固定化しない方がいいという組織の雰囲気づくりもわからなくもないですが、そういう流動性が保てるような仕組みがちょっとあってもいいような気がします。

金澤園長 道内に四つある動物園で一つの事務組合をつくってやれるのであれば、今言われたことは不可能ではないですね。

山本委員 行政体が違うから難しいということですね。

笠委員 人材としては、そういう意欲がある人が結構いると思います。北大の植物園というのは、昔は高卒しかいなかったのです。ところが、最近入ってくる職員はみんな修士課程卒業者です。職員自体がみんな論文を書いています。あれは、20年くらいでほとんど代わりしてきていますから、そういう意欲のある人を入れることによって質は上がると思います。ですから、高卒に限るという理由はちょっと不思議だなという感じがします。

原委員 東京都の場合はどのようにされているのですか。今は協会の方でされていますね。

小宮委員 東京都は、この4月までは動物の方も東京都直営でやっていたけれども、今度は動物園協会になりまして、人の採用も動物園が独自でできるようになりました。これはメリットだったと思います。今までは都の試験で、行政職だと畜産職、水産職、獣医職で、この人たちはどこに行くかわからないのです。畜産試験場に行くかもしれないし、衛生局へ行くかもしれません。もちろん、ねらいはつけられますよ。動物園で実習していたとか、特に動物園に関心を持っているとか、そういうことはできますけれども、原則はそういう形でしたし、現業の場合もそうでした。今度は、これが直接採用になったので、非常に優秀な職員をとれたと思っています。要するに、動物園でやりたいという意欲のある人をね。

原委員 また、トップのマネジメントの面でも、異動が発生しなくなりますね。

小宮委員 ただ、東京都は五つの動物園がありますので、その中で回しています。

あとは、水族館は全国的に結構動くのです。というのは、水族館は民間が多いのです。ですから、あそこの飼育課長が向こうの館長になったりということはありません。

高木委員 突然、大きなボールを投げてしまいましたが、市立という経営自体がうまくいかないのではないかと思うのです。人事異動とか、全国的に異動ができて、この人は育てたいと思ったら、それは中卒でも高卒でも関係ないと思うのです。先ほどの話で、その人が一つの世界の中においては成長し切れないということは、私も小さな組織を運営していますから同じ悩みがあります。ですから、その人をどう育てるかとなると、やはりネットワークの中で外に出したり入れたりしながら、あるいは、別の団体へ行って育っていくということを考えていかなければならないのですが、それが今の市の仕組みの中ではできかねる。ですから、ボールとしては大き過ぎるかもしれないし、この委員会だけでは結論が出ないと思いますが、大きな構想の中に、外に出すとか、運営形態をどう考えていくべきか

みたいなことを大きな命題として出すべきだと思っています。

それで、先ほど生きがいとは何なのかという質問をしたのですが、経営の根本のところ
に少し触れられないかなと思っていたのです。

金澤園長 今のお話は、行政監査の資料の中にもきちっと書かれています。というのは、
今は、札幌市立は外せないわけで、札幌市が建てて運営しているというのは事実です。そ
れを少しでもできるようにということでは、民間に譲渡するといえれば別かもしれませんが
れども、最大やったとしても指定管理者という方法しかないのです。ですから、今後、そ
れを視野に入れて考えてくださいというのは、行政監査の中でも指摘されています。それ
は、これから最終的な基本構想を出す中には……。

高木委員 この委員会としても、それが文言として入れられるのですね。

金澤園長 入れていこうと思っています。

とにかく、今のままでは民間に委託したり指定管理者にしたりということはちょっと不
可能だと思います。というのは、全国で考えればどうか分かりませんが、道内で動物を飼
育できる受け皿は余りないと思うのです。例えば、クマに関してはのぼりべつクマ牧場の
加森観光さんはオーケーだと思います。しかし、ほかの動物はどうかといたら、首をか
しげなければならぬところがあります。本当に受け皿があるのであれば指定管理者や委
託ということは不可能ではないと思いますが、現状ではちょっと難しいと思います。運営
をやるだけでしたら民間でも十分できますが、飼育までとなるとちょっと難しいと思いま
す。ですから、今、上野動物園の小宮園長もおられますが、上野動物園は動物園協会とし
て指定管理者となって初めてできたものだと思います。これが初めから民営だったら、今
のお話は大丈夫だと思います。

高木委員 今のできないという理由がよくわからないのですが、市の現業部門の中から
異動してきた方々で飼育しているわけだから、それはノウハウを持っている方がどこかに
いればできるのではないですか。

金澤園長 ですから、私どもの指定管理者というのは、我々が人を集めるわけではなく
て、どこかの企業なりグループなりに委託して、そこの方が集めるかどうかです。

笠委員 札幌市の公園の場合は、受け皿として公園緑化協会という財団法人ができて、
今、大きな公園はほとんどそこが管理をしていますね。動物園の場合は、そういう動きは
全くなかったのですか。

金澤園長 今までは、指定管理者になじまないという整理できていました。やはり、指
定管理者になるとすれば、少なくとも収支でとんとんくらいまでいかなければできないわ
けです。前から説明させていただいているように、今は収入関係で3分の1で、3分の2
は委託料として札幌市が出すかどうかです。それでも、企業として本当に合理性を出して
利益を上げられるかどうかという問題があります。ですから、そういう機運が醸成されれ
ば、当然、札幌市だって指定管理者を考えるとします。

笠委員 これまでの問題点の中では、トップがどんどんかわるというマイナス面が非常

にあったわけですね。そういうことを考えれば、むしろ受け皿をつくってどんどんやっていった方がいいというメリットもあります。そういう議論も、この中には当然出てくるわけですね。今後の動きとしてね。

金澤園長 そうですね。

前に服部委員が触れられていたように、今、動物園は一般会計の中に位置づけられているけれども、少なくとも収支がわかるように特別会計にかえてはどうかというのが、そういう見せ方だと思います。そして、収支が見えるようになって、企業の方もやれるという見通しが立って初めて委託できるのだと思います。全然関係なく、とにかく札幌市は指定管理者に委託するのだからだれか手を挙げなさいといっても、応募者がなければ結果は同じです。

服部委員 運営形態というのはきょう初めて話題になりましたけれども、今までは札幌市立としてどうするのかということで議論してきたと思います。この辺を、この委員会としてもきちっと整理しておく必要があると思います。やみくもに民間に委託するよりも、まずは札幌市立の円山動物園をどうするのかというものを描いた上で、そこで足りなければさらに突っ込んでいくという形がよろしいのではないかと思います。

原田委員長 そういうことだと思います。

今まで、そういう話は余りはっきり出てこなかったわけです。ただ、園長がおっしゃるとおり、行政監査報告書には、運営のやり方がまずいのではないかと、それを抜本的に変える方向も検討しなければいけないということで、そういう任務をこの委員会は負っております。ですから、今のままでいく場合と、今お話が出ておりました指定管理者への移行ということも視野に入れて、どちらであればどうなるか、それまでの段階も幾つかあるのではないかとということで特別会計というお話も出てまいりましたが、そういう段階をそれぞれ比較して、当面、どういう方向で進んでいって、こういう条件が満足されるのであれば次へ移行するという構想を報告書としてまとめていくと。これは、モデルがきちんとしてこなければ比較もできませんので、次のステップで検討していきたいと思います。

そこで、きょうは具体的な提案が出ておりますので、その項目について、もとへ戻って、資料2の円山動物園からの提案の中で、特にご説明がありました2ページあたりから逐次やっていきたいと思いますが、そういうことでよろしいでしょうか。

(「異議なし」と発言する者あり)

原田委員長 それでは、まず1の改善点、現獣舎については、先ほどご説明があった内容は特に抵抗がなかったように思いますが、このような方向でいくということによろしいでしょうか。

服部委員 その前に、円山動物園からの提案ということですが、これは短期でやろうとしている提案なのではないでしょうか。それとも、中期的な考え方でまとめられたものなのではないでしょうか。いずれにしても、私どもの委員会の中で出てきた内容をまとめてくださったと思いますが、考え方としては短期決戦型の改善点を描いているのでしょうか。

金澤園長 改善点やソフトといった理念にかかわる部分は長期的なスパンで考えておりますが、施設そのものの獣舎をどうするかというところは、将来、きちっといいものができればいいということで、それまでのつなぎとしてこういう仕掛けができれば、当面は動物園として市民にも楽しんでいただけるようなつくり方に変わるのではないかという視点でつくっております。

服部委員 そうなると、基本構想の大まかな理念の描き方がこの中にまとめられたというふうに見てよろしいですね。

金澤園長 はい。

金澤園長 そういうことでご意見をいただきたいと思います。

小宮委員 改善点の2番に、獣舎が狭いため広げる工夫をしてとありますが、一番お金がかからないで簡単に広げる方法は、今、大きい動物が入っている獣舎を小さい動物にかえるのです。下の方に選択というのがありますが、それが一番簡単なのです。例えば、ニューヨークで小さなサルたちを飼っていた部屋がありまして、それでも一つ一つは2メートル・2メートルくらいあったのですが、市民からは、そんなところに入れるのはかわいそうだと。それでどうしたかという、壊したのではなくて、マウスハウスというネズミの展示にかわったのです。ネズミにとってはすごく広々としているわけです。ですから、建てかえるのではなくて、そういうことをやっている例があります。

僕がさっきゾウのことを言いましたが、それは市民に問いかけるのにも非常にいいと思います。前に、魅力がない動物というリストがあって、アライグマなどは三角がついていましたが、そういうものがないなくとも市民は騒がないはずで。でも、円山動物園ではゾウの花子の次は飼わないのだ、それは世界の流れがこうだからということを説明したら、僕は議論がわき起こるのではないかと思います。ですから、いろいろな言葉を使うより、花子の次をどうするかというのは一つの問いかけとして効果があるのではないかという気がしました。それで、先ほどヨーロッパ、アメリカのゾウの動きの話をしたのです。60歳ですから、本当に真剣に考えなければいけないと思います。

原田委員長 今、小宮委員から問いかけがありましたけれども、確かに、ゾウの花子は先がそんなに長くないということを感じていて、先月還暦を迎えたばかりということで、非常に高齢化しております。先ほど、ヨーロッパやアメリカではこうだというお話もお聞きいたしましたけれども、この辺についてはいかがでしょうか。

高木委員 ほかの大きな動物はどんな状況なのですか。ゾウの花子以外にもキリンがかなり高齢化しているということはあるのですか。

金澤園長 高齢化している動物は結構います。というのは、円山動物園は飼育環境が結構いいものですから、長寿動物が多いのです。そういう意味では、花子と一緒に、もし死亡したりということがあると、次の補充をどうするかという問題が出てきます。

今でしたら、花子がいて、キリンがいて、カバですね。それから、ライオンの雄が結構いい年で、いつ行っても寝ている状態です。あとは、ヒグマが2頭とも30年を超えてい

ます。そういう状態ですから、高齢の動物は結構います。ある種、それが飼育員の誇りでもあると言うと変ですが、長生きをさせられる飼育環境なり飼育技術なりを持っているというのは動物の一つの売りではあります。

原委員 ただ、もし高齢の動物の後に入れるというふう考えた場合、やはり難しいのはゾウくらいですか。この間いただいた資料を見る限りでは、キリンを入れることはできるようですね。

金澤園長 やはり、一番難しいのはゾウですね。先ほど小宮委員が言われたように、複数で持ってこなければならぬということと、それなりの整備をしなければなりません。

笠委員 アムールトラも随分少なくなったという話を聞きました。野生はほとんどいないと。

金澤園長 それこそ、希少動物と言われているものも結構います。

大谷副園長 ゾウの獣舎は、繁殖に適した施設ということになりますと、少なくとも10億円はかかります。

上野は15億くらいですか。

小宮委員 そうです。

大谷副園長 そうなると、予算というだけではなくて、市民のぜひ円山動物園にゾウが欲しいという要望があっても、市民に寄附していただいても1億がいいところなのかなと思いますので、やはり、どこかのスポンサーということまで考えなければ建てられないと思います。

岡田委員 旭山動物園のナナちゃんも死んでしまいましたし、ほかの道内の動物園でもゾウは単独でしか飼育していないですね。そうすると、円山の花子さんが死んでしまったとして、どんどん高齢化してほかの動物園にもゾウがいなくなってしまうと、北海道の動物園からゾウがいなくなるわけですね。そうすると、やはり北海道の動物園で一番古い円山に、ぜひ、北海道を代表してということではないですけれども、ゾウを何とか残してほしいなと一市民として思います。

金澤園長 先ほど動物園の飼育員の話をしたんですが、資料2の8ページの一番上に、まさに今の答えになるかなというところがあります。ゾウの中の一番上に、新ゾウ舎の建設構想を検討すべきとあります。それで、ここに書いてあるように、現時点で改築しても花子が新しい場所になじめるかどうかというのは非常に問題なのです。そうすると、花子の場合は、今の場所で環境になれたまま置いておくことが長生きできる方法だろうというのが一つの答えです。

そして、花子の死後、市民を巻き込んで改築を目指し、また新ゾウの入手を目指して取り組むという考え方です。今、岡田委員が言われたように、市民としてはという形で議論しなければ、今の動物園の判断として、円山動物園にはゾウを置くのだ、だからこうやるのだという話にはなかなかいかないと思います。そして、10億の獣舎をつくっても、ただゾウがいればいいではなくて、それなりの環境を整えるとなると、すごい面積をとるの

です。そう考えたときに、今の園内なのか、園の外に動物園を広げるのかという議論もしなければ、ゾウが必要だ、必要ないだけではできないのかなと思います。

それで、ここに書いてあるのは2行ですが、ゾウに関しては飼育員ともすごい時間をかけて議論してしまして、その答えがこの2行なのです。

小宮委員 今、ゾウと言ったのは、ゾウはやはり動物園の象徴的動物でしょう。それで、札幌市民はみんな花子を知っているわけですから、リスタート委員会をやっていますよということよりも、将来、円山動物園はゾウのいない動物園になるかもしれませんよという問いかけの方が反応があって、皆さんは真剣に考えてくれるのではないかと思ったのです。

でも、世界の流れは本当にそうになってしまして、この間、タイからシドニーに行ったのも6頭です。まだ日本は2頭で環境省が出しますけれども、もともとは群れの動物なので、群れで飼わなければ本来はかわいそうなものだ、2頭でも持っていくべきではないということで、ゾウとかイルカはそういう話になっているのです。今、沖縄や大阪がゾウを2頭入れようとしていますけれども、やはり欧米の国がタイやインドに圧力をかけていて、なかなか実現しないのです。ですから、2頭ではなくて、例えば北海道のゾウを円山に全部集めるくらいのつもりでないと飼育を続けられないと思います。

原田委員長 どうなのでしょう。リスタート問題ではないような……。

大谷委員 動物園のシンボルを使って市民の注意を喚起するという方法はとてもいいと思いますけれども、市民の回答がすぐに出るわけではないですね。もちろん私たちの委員会でもです。ですから、将来、ゾウ舎にしてもいいくらいの面積の建物を何か別の用途でつくっておいて、そして市民の議論が沸騰してきて、ゾウを置きましょうということになったら、将来的にそこはゾウ舎にする。花子さんが亡くなっていたら、そこはゾウ舎にかえるという形は無理でしょうか。

原田委員長 そういう考えもあると思います。

高木委員 ほかの大型の動物もそうなのですか。例えば、カバとか……。

小宮委員 いえ、やはりゾウですね。欧米の人は、イルカにも反応します。イルカも、日本は追い込み猟で、これは漁業としてやっているのだということですがけれども、そこから水族館に入れているのは、今、批判されています。やはり、特別な動物なのですね。

笠委員 ゴリラなども群れでということではないのですか。今は1頭だけで飼っていますよね。

大谷副園長 今、子づくりに京都に行っています。ですから、今、道内にゴリラはいないのです。

笠委員 貸し出し中なのですね。

小宮委員 ですから、ゾウも、みんなフリーディングローンで、複数で飼えるところに持って行って子どもをふやすことを目指そうということですか。

笠委員 では、霊長類などはそういう可能性は高いのですか。

小宮委員 ゴリラなどはそうですね。

山本委員 どんない動物園というビジョンというかコンセプトにすごく影響される象徴的なことですね。野生生物保護とか教育ということの世界レベルで考えて円山はこうするのだと言うのであれば、ひょっとしたら、ゾウはあきらめましょう、いないけれども、いないことに意味があると言うのかもしれないし、それでも北海道の円山動物園だけは、動物園の最初の志みたいなものがあってほしい。でも、それをうまく両立するのに経済というすごく大きな壁があって、難しいですね。

原田委員長 私は、今、小宮委員が言われたように、世界が野生生物の保全という趨勢になっているわけですから、そういう動物が欲しいから無理をしてというのは一地域の人間のエゴではないかと思えますし、生物の保全という点からいくとルール違反ではないと思えます。ですから、周りの国々から白い目で見られながら札幌市民が喜んでいてという姿にしてはならないと思えます。

そういう意味で、本当のところは、そんなに費用がかかれば6頭でいくべきだとかここで決めていきたいのですが、やはり費用面の問題があります。ですから、どれだけの維持費や建設費がかかるのかということを中心にきちんと出して、ここである結論を出すべきではないかと思えます。花子が倒れてからではちょっと遅いので、事前に、この委員会である程度の目安の数値を出しながら結論を導いておく必要があると思えます。もし、だめだ、飼うことができないという結論に至ったとしても、なおかつ、この動物園が北海道あるいは札幌市民のために成り立っていくにはどうしたらいいのかということを考えていくべきではないかと思えます。

山本委員 そういうときに、この前発表されたオオワシなどのプロジェクトはすごく意味があると思っています。北海道の動物園として、北海道の野生動物の復元にまず取り組むというのは結構大事なことで、ある種の表明をなさったのだと思えます。こういうことを積み重ねていくべきかと思えます。

原田委員長 私もそのように思えます。

そこで、資料の2ページ目に戻りますけれども、動物等の選択と集中というのがかなり重要な提案内容だと思います。コンセプトに基づく動物等の選択と集中を実施する。限られた敷地の中で各動物ごとに広い飼育環境に改善するとなれば、園路を狭くしたり、動物の選択と集中を行う。それから、獣舎の重層化を図る。財源等が優先されないということになっていますけれども、次のページに選択と集中のものさしというものがございしますので、きょうは、この辺の一定の判断基準についてご意見をいただきたいと思えます。

小宮委員、これについてはいかがでしょうか。

小宮委員 まず、コンセプトというのは、動物園全体のコンセプトもあるでしょうし、動物舎ごとのコンセプトがあると思えますけれども、それを変えてはいけないということではなくて、変えていいというふうにすると、すごく楽なのです。

例えば、熱帯動物館には熱帯と言いながらユキヒョウとかアムールトラとか暖房が要らないものまで入れていますが、熱帯動物館の最初のコンセプトは、雪が降っていてもあそ

ここで見れるとか、集中して管理するということだったと思います。ですから、僕は、あそこは郷土動物館にかえてしまってはどうかなと思います。例えば、キリンのところにはヒグマが入れば、ヒグマにとっては物すごく広いところになるし、内部は薄暗いですから、夜の北海道、札幌の動物たちですね。ゾウの後にはススキを植えて 本州から来るとすごく思うのですが、薄野があって、狸小路があるのだから、ススキが生えていてタヌキがいたのだろうと。ですから、ゾウがいる室内部分を夜にして、ちょっとススキを植える。それで、エゾタヌキも減っているそうですが、そういうものを見れるとかね。

それからもう一つは、さっき言ったように、大きな動物のところを小さい動物にかえると広がります。ですから、ライオンとトラもあそこにいる必要がないとすれば、そこにキタキツネがいたらすごく広い動物舎になるのです。それから、夜の空間はモモンガなどを飛ばしたらすごく人気だったということですが、地元の動物だって人気が出るのです。だから、夜の空間でモモンガやフクロウを飛ばしたり、シマフクロウを飛ばしたりということはできるのではないかと思います。

要するに、あれを建てかえるとか壊すのではなくてそのまま使うのだったら、飼育員たちは、自分たちの動物をこのまま飼うという発想で考えているから、全部かえてしまうというのは考えられないと思いますけれども、例えば熱帯動物館というコンセプトを捨ててしまう。

それから、世界の熊館というのも、最近はそのような分類で並べるのははやらないのです。ですから、例えば、食物連鎖の頂点の動物たちがいますといえば、ホッキョクグマがいて、隣にアフリカの食物連鎖の頂点のライオンがいますよでもいいのです。そういうふうに、思い切ってコンセプトを変えてもいいのです。

これは、内部から、特に飼育をやっている人たちは出しにくいかもしれないけれども、こういう委員会かもしれないし、横にいる人が思い切って言ってあげると、それならそうしようということになるような気がします。ですから、コンセプトのところでは、今まであるものにずっととらわれていると、何かが死ぬと、それと同じものを持ってこなければいけないと思うのです。

また、札幌という寒いところでマレーグマとかナマケグマというクマの種類をそろえる必要があるのかなと思うのです。それは、コンセプトを変えてしまえば、あそこで何でも飼えるのではないかと思います。あるいは、何でも飼えるコンセプトにしてしまうということですね。

山本委員 もともと展示のコンセプトがはっきりしていないというのが改善点のソフトにあったところで、4の選択と集中はそのコンセプトに基づくと。そのコンセプトはどのコンセプトかという話もあるのですが、もう一回、そういうことをここで議論することもあるのでしょうか。

金澤園長 私が結論を出すわけではないですが、コンセプトのところは大事な話なので、その議論は必要だと思います。

そういう意味で、資料1の主な検討課題のところ、今は4回目ですが、きっちり議論されていないのは、1ページ目と2ページ目は基本構想のコンセプトというか基本となる部分ですけれども、2ページ目の(4)(5)(6)環境教育や種の保存、産学官・市民との連携というところの議論がまだ足りないのかなと思っています。そういう意味では、こっちの議論もしていただかないと、次の資料4の議論に進めないなという感じがしています。

多分、山本委員が言われているコンセプトと私が言っているコンセプトは意味が違ってきますけれども、こういうところの議論もしていただければと思います。

山本委員 だから、今、小宮委員が二つの意味でコンセプトとおっしゃいましたが、そこを少し整理しておかないと、ぐちゃぐちゃになってしまいそうな気がします。

金澤園長 ただ、動物園からの提案の(1)のコンセプトに基づく動物等の選択と集中というのは、これからコンセプトができるだろうという前提で、それにあわせて整理しなければならないという趣旨です。

山本委員 わかりました。

原田委員長 今までこの場で言われているコンセプトは、展示コンセプトということで、生息地域別といった種類別に展示してはどうかとか、前回の第3回目で気候ゾーン別に分けたらどうかという全くの案を出ささせていただきましたが、それが1ページ目でいうAです。そして、Bとして目的・役割別に展示する。Cというのは価値・体験別に展示する。Dというのは伝統・歴史・経験といったようなものさしで展示する。そういう展示コンセプトとして今まで議論されてきたのだと思います。

もう一つ、今ここで言っているのは、コンセプトに基づく動物等の選択と集中ということで、一つの考え方では、実は円山動物園というのは非常に多くの生物種を持っています。私が読んだ本を信じるならば、5市のうちの一つに入っているくらい多くの生物種を持っているわけですが、それを整理してもいいのではないかという考え方が選択と集中ではないかと思います。

これは金澤園長に確かめたいのですけれども、そういう意味で書かれているのです。

金澤園長 はい。

原田委員長 そして、そういう選択と集中を行うためには、ものさしが要るのではないかと、また、集中という考え方は、それでゾーニングしていくというふうに考えていいのではないかと、私はそういうふうに考えております。

そういう意味で、今回は、選択と集中という言葉が初めてこのテーブルに乗せられたので、これについて検討をしたいと考えておまして、展示のコンセプトというのはその次に来るのだらうと思っております。今回は、選択と集中ということについて委員の皆様からご意見をお出しいただきたいと思っております。

のっけにゾウの花子の魅力が非常に強いので、彼女がいなくなったら困るだらうというところから始まってしまったのですけれども、確かに非常に重要な生き物で、子どもたち

はみんな、「花子はどこにいるの」と関心を持って来ておりますので、テーマになったわけです。ただ、単純に生物種が多いということを誇る時代なのか、それとも、思い切ってこちらでものさしをつくって、そのものさしに合わないものはどんどん捨てていくというふうに、むしろ、この動物園のコンセプトを明快にして、飼っている動物はこのような考え方で私たちは飼うのだということをきちんと意思表示をする必要が一方ではあるのではないかと思います。

この辺は非常にジレンマでして、少なくするのか、維持してたくさんの生き物を見せるのかという点は大きな分かれ道であろうと思いますが、この辺についてはいかがでしょうか。

小宮委員 少なくするときに、普通の動物たちを減らして、希少種とか高いものを残すという傾向があるのですが、都市の動物園では、普通の動物たちも見たことがない人が多くて、上野では一時、そういう動物が減ったのです。タヌキもいなかったし、豚もいませんでした。今はそういうものがあります。

もう一つは、普通の動物を減らすと人を育てるのが難しいのです。みんな希少種ばかりになってしまうと、飼育係が慎重になって、自分から何かしようとしても、班長の意見を聞いてからとなるのです。ですから、これは普通だからよそうということで減らすのはちょっと危険だと思います。いろいろな動物の出産や死を経験して飼育係は育っていくわけですけれども、例えばゾウを一生やったとしたら、ゾウの方が長生きして死を経験しないかもしれないし、出産も経験しないかもしれません。けれども、ヤギなどを飼っていれば、新人の飼育係はすぐにそういう経験をするわけです。

単純に整理したときに、普通種が減るといというのは、人育てという意味ではよくないなと思っっています。

原田委員長 そういう意味で、小宮委員は郷土動物館という呼び方をされたのではないかと思いますけれども、身近に、札幌の森の中にそういう動物たちをちゃんと集めて知らせるべきだという考え方も確かにあるのではないかと思います。キタキツネとか、エゾリスとか、先ほど例を挙げられたようなものですね。それは、このテーブルでも、北海道独自、あるいは北海道特有の生き物をきちんと札幌市円山動物園は見せるべきなのだ、その生き方を教えるべきなのだというご意見を出されていたように思いますので、その辺はそう違ってないのではないかと思います。

確かに、円山動物園はいろいろなフクロウの種類もいますね。

大谷副園長 フクロウは4種類います。

原田委員長 それで、選択と集中のものさしというのが3ページに書かれています。一定判断基準が必要になる、動物類のものさしということで、(1)から(9)までいろいろなものさしがあるということが紹介されています。

小宮委員 今言ったことでいうと、10番目に飼育係を育てるといのが入るのです。それは、本当はだれも気がつかないのだけれども、結構重要かもしれません。

原田委員長 私は今月の末にスウェーデンに行くのですが、スウェーデンには熱帯動物園というものがあります。名前はちょっと覚えていないのですが、やはり、寒いところは専門的に熱帯動物を集めている館が人気を呼ぶということもあるように思います。円山動物園ができたときも、熱帯動物館からできました。熱帯動物館と熱帯植物園とは虫類館と昆虫館のセットが最初にできたと思いますけれども、そういう経緯から見ても、熱帯というゾーンに生息する動物は見たい、知りたいということで関心を呼ぶのではないかと私は単純に思っています。

笠委員 これは私の個人の意見というより、アンケートの結果を見ましても、60%の人が本物を動物を見たり触れたりする情操教育の場というふうに回答しているというのは、見たことのない動物に対するあこがれを市民として持っているからだろうと思います。市街地の中にクマが出たりシカが出たりするのがごく普通なまちですし、キツネ、テンに及んでは至るところにいますので、そこでクマを見たいということではないのかなとも思います。ですから、北海道の動物があってもいいのですけれども、ここは北海道全体から来ますので、南の動物とか、北海道にいない動物を展示するということが必要ではないかという気がします。

原田委員長 私は、どっちにウエートというよりも、最近特に、子どもたちと生き物とのかかわりという面では、本当にペット化した犬とか猫とか鳥の一部とか、そういうものについてはかなり親しくしていますけれども、ほかの生物、今まで日常的にいた生き物との接触が非常に少なくなっているように思います。ザリガニを釣ったのかというと、多分、私の年代の人はほとんど釣った経験を持っていると思いますが、今の子はそういうことがないし、メダカはとったことがない、あれは買うものだと思っている。そういうように、触れ合いが本当に少なくなっているような気がするので、日常的な動物が本当に目の前を飛んでいく、目の前をはっている、目の前で泳いでいる、ごそごそしているといったような、自然と触れ合う、森とともに生き物が一緒にいるようなゾーンをつくるべきなのではないかと思います。それと同時に、片方では珍しいものですね。本で見えても、生きているものはやっぱり違うよねという感動を与えるような生き物が共存している環境をつくるべきではないかと思います。余り順位をつけてしまうと、何となく寂しくなってきた感じがします。

そこで、もう一度もとに戻ると、今は二つほど出てきています。北海道にいる動物をもっと身近なものとして、目にとまるものとして見せる、生きている姿に触れさせる種をきちんとそろえる。もう一つは、日常では絶対見れない、テレビで見るのと本物は全然違うという動物の生態を見せる。あとは、どういう世界なのかということです。

非常に希少で、動物園でそれを繁殖させて自然に復帰させるような方向での動物の飼いが動物園の一つのミッションとしてあるというのは、この前から言っているとおりで、確かにそういう世界もあるのではないかと思います。それから何かということですね。

小宮委員 これは北海道産という範囲に入るのかもかもしれませんが、オムラサキとオオワ

シの話がありますね。ですから、地元の域内保全に貢献できる動物を動物園が一つずつ持っていることがステータスになりつつあるという意味では、その2種類でもいいかもしれませんね。余り欲張ってもできないので、特に地元の野生生物の保全に貢献する種という言い方もあるのかなと思います。

笠委員 このオオムラサキのプログラムは、確かに種としての地域性みたいなものの意味合いはあるのですけれども、もう一つは、1ページの円山エリア全体というところに、円山地区、宮の森地区におけるまちづくりにおける動物園の存在が示されていないとあります。実は、この動物園の近くにはエゾエノキが結構あるのです。それは、地元の人知らないだけで、結構な大木が幾つもあるのですけれども、そういうものを地域の人が見つめ直して、さらに植えられる場所に新たに植えていくとか、むしろ動物園の中だけでこれを見えるようにするのではなくて、動物園がそういう技術を提供して、地域全体でオオムラサキを見えるようなまちづくりとか、そういうふうに出ていった方が動物園の存在感が出てくるような気がするので、そっちの意味合いも兼ねてこれを主張した方がいいのかなという気がしていました。

原田委員長 だから、動物園の中で囲って飼うという今までの考え方をちょっと超えて任務を持つと。エリア全体で……。

笠委員 オオワシの場合はそういうふうにはいかないでしょうけれども……。

原田委員長 これは大変ですけれどもね。

小宮委員 広島のおオサンショウウオがそうなのですけれども、大変だから1種なのです。何種も手を出すとだめなのです。

服部委員 そこに選択と集中のよさがあるのですね。

原委員 いろいろ見たいものはありますが、札幌の中でもどの山にザリガニがいるとか、高木委員はそういうことをご存じだと思いますけれども、その道しるべというか、園がそういうものの発祥の場であってもいいかもしれませんね。

小宮委員 域内保全というのは、生息域内の保全のことです。それに対して生息域外の保全を域外保全と呼んでいて、すなわち動物園での保全は域外保全なのです。だから、域内保全に貢献する域外保全というのは動物園の中だけではなく、外にも出ていくということです。

笠委員 円山公園の木道の横などにエノキをいっぱい植えておけばどんどん育つのに、あそこは一本もないのです。もっと奥の方に行けばぼつぼつとあるのですけれども、そういうことはすぐにできると思います。

原田委員長 飼育員の方々からは、今のような選択と集中という課題に関して、特にこういう動物に絞ってというような意見は出ておりませんか。

金澤園長 特にこの動物というのはまだ出ていません。というのは、動物園をどうするかというコンセプトをなしに、あれが要る要らないという整理をしてしまうと、それが先に出てしまう可能性があります。やはり、コンセプトにあわせて、今まさに、域内保全の

話で、北海道ゾーンのようなものをつくりますよといったら、それにかかわる動物は残さなければならぬ話になりますので、そういった視点から取り組もう。そして、一応のものさしだけは準備しておこうと。そして、将来、そのコンセプトが決まれば、やはり検討しなければならないという考え方です。

高木委員 私は、北海道の動物にはこだわった方がいいかなと思います。北方圏の動物という方が特徴が出るかなと思います。ネズミ一つとっても結構いっぱいいるのですが、ほとんどの人は見ていないと思います。私の家は、ぼろ家で田舎ですから、アカネズミやヤチネズミが出てくるのですけれども、皆さんはご存じないでしょう。かわいいのが出てくるのです。

これは、見せ方はよくわかりませんが、さっきのお話のように、このくらいあったら、すごいものを見せられるのではないかと何となく想像がつくのです。身近な動物でもたくさん見せる方法があるかなと思います。北海道の動物ということを中心にすれば、観光客にもいいかなと思うのです。

笠委員 北海道の場合は、フクロウのいろいろなグッズがあって、集めているコレクターも非常に多くて、しかも、シマフクロウのような特殊なものだけではなくて、普通のフクロウでも身近なところに結構いまして、あれが首をくるっと回すと結構おもしろいので、こういうものが円山公園の中にいっぱいふえるようになってくれれば、みんなはもっと木道を歩いてくれるのになと思います。シンボル動物のような形でフクロウを前面に出そうというのは一つのねらいかなと思います。

金澤園長 補足をさせていただきたいのですが、オオムラサキプロジェクトもオオワシプロジェクトも、それだけではなくて、お配りしたペーパーにあるように、オニヤンマとかニホンザリガニも含めてやっていこうということなのです。その中で象徴的だったのがオオムラサキということですから、そういう昆虫を動物園で繁殖させて、動物園の中でオオムラサキをとられたら困るけれども、動物園の外へ行ったらそれはとってもいいですと、こんな整理が成り立てばいいのかなという視点なのです。ですから、動物園がその域内の中での繁殖地というか生産場になるような仕掛けをつくれないうかという趣旨です。

また、オオワシも、円山動物園スタート時の一種で、オオワシ、エゾシカ、ヒグマの中の一つですから、どうしてもこだわっているのですが、ほかに猛禽類の中ではフクロウやシマフクロウですね。シマフクロウも円山近辺にいたわけですから、そういうものをうまく繁殖できないだろうかという趣旨なのです。だからといって、シマフクロウをこの辺に放して影響があるかどうか、私もまだ理解していないのですが、それはこれから専門家の人といろいろ議論しなければならないと思っています。

今、笠委員が言われたように、シマフクロウが円山の近辺にいたら、楽しいというか、夜に歩けば鳴くわけですから、びっくりするかもしれません。

円山動物園は、動物園でありながら、もう少しエリアで動く人工の動物園と自然の動物園と言うと変ですが、そういう接点をつくっていける場所ではないかなと思います。そんな

視点から、オオムラサキなりオオワシプロジェクトを今回打ち出したのです。どっちにしても、繁殖して、生産基地になって自然に戻せるというところが一つの売りなのかなと思っています。

山本委員 今、円山動物園で、これがすごく珍しくて収集しているものはあるのですか。世界的に見たときに、これはというものは……。

金澤園長 世界的に名前が売れて、何とかやれそうなのはホッキョクグマです。あれは、世界でも何カ所かしか繁殖していませんが、円山はそれに2回続けて成功しているという意味では、世界的にこれから太刀打ちできるところになるのかなと思っています。

それから、は虫類も、珍しい種類のものの繁殖ができています。

大谷副園長 カンボジアモエギハコガメというのは、繁殖の成功ということでは珍しいです。国内で初めてです。

金澤園長 あとは、ヨウスコウワニですね。

小宮委員 オオワシも、釧路も繁殖し出しましたが、前は札幌とモスクワでしか繁殖していなかったのですから、意外と地元の種が大変だということに地元の人は気がつかないのです。

金澤園長 ですから、世界で通用するものは何点かあると思います。

山本委員 動物のことは全く素人なのですが、私は基本的には北海道にものにこだわるというのが一つと、世界的に見て、ワシならここにいるとか、学術的にもすごく高いレベルで世界の野生動物の知的情報の集積の場になるとか、飼育のトップレベルになるというものがあってもいいかなと素人考えで思ったのです。その二つの柱があると、ほかは、手を抜くわけではないですが、次のスキームで割と気楽にやるということでもいいのかなと思ったのです。

選択と集中というときに、何のためにするのかということがあります。コンセプトに基づくとするのはそうなのですが、集客のためなのか、学術のためなのか、研究のためなのか、それによって若干ものさしも変わるのだらうと思います。

今、自分の中で解がないので確たることは言えないのですが、3回、4回の議論の中で私がわかる範囲で言うと、北海道で最初に打ち出したものに強烈にこだわるべきだろうと思いますし、それが、一番最初から議論してきたエリアの中の動物園という大きなコンセプトに合致するのです。ただ、それだけだと残念だけれども、そんなにそんなにバランスシート上の効果はないと思うのです。企業目で見ればですね。

高木委員 ゾウの話が最初に出ていまして、僕もゾウがいた方がうれしいのですが、別の見せ方があるのではないかと思います。本当は動物園には本物がいた方がいいのでしょうけれども、それと同じくらいの大きさのものをつくって、みんなさわりやすいと。

この間、私は直接見ていないのですが、恐竜の展示の話聞いたのです。それは、ゴルフ場の跡地で、地面のところがりっぱの形でくり抜かれているのです。りっぱがこの辺にあって、ちょっと先に足跡があるのです。それで、何とかザウルスがあそこの木の上のも

のを食べていたという展示になっているのです。それは、そこに本物がいなくても、物すごくイメージをもらえるのです。

そのように、ゾウも、本物はいないのだけれども、あたかもそばにいるくらいの見せ方ができると思います。それは舞台の大道具をやっている人たちが考えたらしいのです。

ですから、そういう特徴的なもので、でき合いのもので、すごく実感を伴う形で見せるゾーンがあっても、子どもたちは喜ぶのではないかと思います。

私自身は実際のゾウを見たいなという気持ちがあるのですが、そういったイミテーション化というか、博物館みたいな感じのものがあってもいいのかなと思っていました。

原田委員長 確かに、そういう見せ方もあると思います。必ずしも生きていなくてもいいことですね。はく製にしているオオワシのバアサンを見にくる人がいるのです。それで、昔の思い出を懐かしんでそこで話をしているのですが、それはなかなかいい話だと思います。そういうつき合い方が生じていて、それを生み出した動物園というのが本当の意味での動物園ではないかと思います。

今お話しされたように、生きている動物でなくても、はく製で時計仕掛けで動いている、花子独特の体のゆすり方をしている、あれが花子だよと思返せる、これはアトラクションですけれども、それを見にくる人もある程度満足できるのではないかと思います。

今は、昔の恐竜を本物そっくりに動かす技術も随分ありますので、そういう形での残し方もあるのではないかと私も思います。

原委員 今の意見に関しましては、少なくとも、一度見るとその後の魅力がなくなるということを感じざるを得ません。確かに、一度目はおもしろいと感じるのですが、リピーターという意味では、また人を呼べるのかということ、ちょっと魅力としては欠けるのではないかという気がします。

高木委員 もちろんそうです。アイテムとして残しておくとしたら、そういう方法もあるかなということですね。

原田委員長 はく製というのは、そういう残し方ですね。

服部委員 お金の面では一番助かりますね。

原田委員長 はく製なのだけれども、ちょっと手をかけてあるという残し方もあるのではないかというアイデアです。

一つ目の議題については大体時間がまいりましたので、ここでちょっと休憩を入れましょうか。

それでは、5分ほど休憩をとりたいと思います。

[休 憩]

原田委員長 それでは、第2の議題に入りたいと思います。

議題(2)は、構想案の策定に向けてということで、資料4の基本構想骨格案(事務局

イメージ) というものがございますが、これに入る前に、わかりやすい図がございますので、円山動物園からの提案の中の6ページの図をごらんいただきたいと思います。

先ほど園長から解説がございましたが、動物園の基本イメージとして、私の動物園というタイトルで、このように考えたらどうかと。

まず一つは、一番上に環境教育、学べる動物園というものがございます。それから、右の方へ回っていきまして、動物研究、生命教育、自然学習ということで、ここにも環境教育というキーワードが入っております。それから、下へ行きまして、レクリエーション、楽しい動物園というものがございます。触れ合い、体験、いやし、感動、ボランティア解説とあります。それから、左へ行きますと、自然保護、野生復帰、種の保存、役立つ動物園というテーマがございます。

この四つのテーマが私の動物園を支えているというわけですが、この四つは目標と言ってもいいものだと思いますけれども、円山動物園は、このような機能といてもいいかと思いますが、四つの機能をあわせ持っているというふうに考えられるわけです。

そこで、ここに埋め込まれているキーワードでたくさん出てくるのが、環境教育というテーマでございます。

これについては、資料1の円山動物園の主な検討課題の2ページ目に、検討課題の項目として(4)に環境教育というものがございます。アの動物園として行うべき環境教育としては、現状では、展示やイベントの中で環境への取り組みを呼びかける程度にとどまっております。総合的な取り組みとしての位置づけができていない。イの環境にやさしい施設のPRとしては、太陽光発電などの環境に配慮した設備について、それ自体も環境教育のための教材として活用する方策が必要である。ウの動物福祉・環境エンリッチメントとしては、動物にとっての暮らしやすさ、本来の生息環境に近づける工夫が必要という3項目が書かれております。

これに対して、具体的にどうするのかという解決策の検討が、実はこのリスタート委員会で余り検討されていないのです。

新しく再生される円山動物園のかなり重要なキーワードになっている環境教育、それから、それに関連して(5)の種の保存のPR、これが余りアピールされていない。それから、イとして繁殖・野生復帰プログラム、円山動物園として取り組むべき希少動物等の繁殖、野生復帰等のプログラムが明確でない。それから、ウとして研究活動の推進、動物学、生命学、野生復帰、種の保存に関する研究の充実が必要という三つの項目ですね。

それから、(6)、これはさっきちょっと触れられましたけれども、産学官・市民との連携ということで、この連携というのは一体どうするのか、どういうふうにしていくべきなのか、内容はどういうことなのか。

この(4)と(5)と(6)のあたりのディスカッションがちょっと足りないのではないかと、そうしないと、動物園の基本イメージの四つの機能をうまく説明できないのではないかと残されている問題点でございます。

そこで、最終的な構想をどう取りまとめるかということを残された時間の中で行わなければいけないので、この辺について議論をしていただきたいと思います。

ただ、環境教育というのは、今まで意見としては出てきておりますが、これは本当に楽しいのか、動物園に来た子どもたちは喜んで帰るのかというあたりが、反面、不安なところでもあるのです。

先ほど小宮委員から、世界の趨勢としては種の保全あるいは野生動物の保全という流れにあるというお話がありました。あるいは、前回の第3回目のテーマでいいますと、生物多様性の保全と再生と維持という大きなテーマに即して、では子どもたちに、あるいは生涯教育としての環境教育を動物園が行うに際してどのような効果を生むのか、あるいは、これは本当に人を呼ぶのか、それから、ここで一体何を見せればいいのかという事柄についてディスカッションをいただきたいと思います。

笠委員 動物園でやる環境教育の例というものが今すぐに思い浮かばないのですけれども、札幌市の場合は、白川の自然教室という環境教育の拠点があります。そこでは、どちらかという、植物との触れ合いとか、農作業体験とか、昆虫とか、あれは定期的に子どもたちが行っているのでしょうか。

うちの子どもたちは全然行かなかったので、どういう使い方をしているのかなど。

その辺が、市内のこういう施設とのすみ分けみたいなものがあるのかどうかということがよくわからないのですけれども、今、いろいろな環境教育をやっていると思います。

斉藤委員 北方自然園というものがあります。これも、北国ということにコンセプトを置いて北方のものを植えてきたのですが、やはりここ十何年たって、なかなかうまくいかないのも現状です。あそこは、稲を植える、芋を育てる、刈り入れに子どもが来る、バスで植えるときと収穫に来て、中間は職員の方がやるという形ですね。それは、自然と触れ合うといいますが、体験の一部をさせてあげるといことですね。

あとは、滝野の方に行くといろいろなことができますので、5年生を中心に、滝野の自然の中でいろいろな活動をしています。

それは、環境教育という構えより、自然体験が今は欠けているからということやっています。それで、小学校でいう自然環境というのは、5年生がやる石油の問題や自動車の問題というのは、余りおもしろくなくて、お勉強的なのです。ここでいう環境教育というのは、言葉が適切かどうかわかりませんが、動物や自然といかに触れ合うか、いかに楽しい場が提供されるかという感じの方が強いのかなと思います。

高木委員 環境教育と言うと物すごくかた苦しくなるのですが、環境教育のソフトプログラムの開発みたいなものはぜひ入れてほしいのです。

例えばうちもヒグマの授業をやっているのです。寿都高校とか、本当にクマがそばにいるような高校の2年生などでやっています。それは、やんちゃな男の子たちもいるのですが、一連のプログラムをするわけです。どんなことをやるかという、先ほどはく製の話をしましたけれども、着ぐるみもあります。デフォルメした着ぐるみで、クマのしし踊り

ができるというコンセプトで作りまして、2人入るのですけれども、つかみでそういうものを登場させたりしています。でも、その後に本物の大きなはく製とか、すべての骨格標本をばっと見せると、最終的に高校生たちは、デフォルメしているものではなくて、本物にみんな群がります。

それから、「クマかるた」というものも開発しました。クマの生態をかるたにしているのですが、そのかるたで最後に振り返りをするのです。話してきた一連のヒグマの生態を、最後にかるたをとらせながらすり込むわけです。

また、クマの歩くスタンプを最初につくったのですが、そのスタンプは、最終的には修了証に押すのにはやってしまって、小学生の場合はそれで喜んだりします。

そういうプログラムという流れにしてつくるといえることがあると思います。動物園全体には、森林や自然触れ合いのプログラムはすごくたくさんあるのですが、野生動物や動物の生態とか多様性とか生きている様子を伝えていくようなプログラムを僕らの世界では見たことがないのです。

今、北海道の環境教育ミーティングで、12月に2泊3日でやるのですけれども、その中の一つの分科会に、たまたまこういう話題が出てきたので、ある人が、動物園と環境教育プログラムを考える分科会をやろうと言い出したのです。それは、シカならシカの生態をゲームを通しながら学んでいこうとか、そういうものは余りないのではないかと思うのです。アメリカには、水生動物とか魚をどうやって勉強していくかというプログラムはたくさんあって、翻訳もされているのですが、トラやゾウやイルカとなると、そういうプログラムが僕らの世界では見たことがないのです。そういうものは動物園の中ではあるのでしょうか。

小宮委員 動物園の環境教育といった場合に、その材料は生きている動物たちで、それが生息環境や行動があってということだとすると、まず手をつけるのはネームプレートなのです。ネームプレートなり解説板が、ただ名前だけ書いているものではなくて、もし環境教育を柱にするのだったら、まず、今ある動物たちの解説、それはお客さんが一番見るわけですから、それを統一した形できれいにすべきだと思います。どうしても、熱心な飼育係のところには手書きがあって、それはそれでもいいのですが、基本的な動物に対する解説がまず第一歩かなと思います。

高木委員 サイン的なもので自分で学ぶということですね。

小宮委員 まず、材料は実物の動物なのですから、その説明ができていないのに外のものには踏み込めないはずですよ。ですから、まずは園内のサインですね。サインというところのサインもありますけれども、特に動物や生息環境に関する解説を具体的に……。

原田委員長 その動物の生息環境の説明パネルとか……。

小宮委員 そういうものをきちんとするということです。それこそ、動物園の人たちだけではなくて、美術大学や芸大の先生に入ってもらって、少ししゃれた形であればみんなも読んでくれます。余り継ぎ足して手書きのものばかりになってしまうと、なかなか読ん

でもらえないので、まず環境教育の一番大事なところは本当はそこではないかと思っています。上野もちゃんとできているわけではないのですけれどもね。

笠委員 今、手稲の富丘に野生のスズランがある公園がありまして、その保全を地域の人たちと3年ほど前からやっているのですが、地元の手稲中央小学校が、それを総合的な学習の中で環境教育として取り込みたいということで、ことしから定期的に来ています。そのときに、今まで地域でやってきたリーダーの方に指導をお願いして、その人たちがボランティアで解説をしながら作業の手引きをするというやり方をしています、今はそれが結構定着してきています。

やはり、円山動物園にはボランティアのガイドさんが非常にたくさんいらっしゃるわけですから、まさにそういう人たちをこの中の環境教育のリーダーというか、伝達者として活用していくということが、子どもたちにとっても一番わかりやすいのではないかと思っています。そういういろいろな仕掛けをやっていただくと、子どもたちにとっては、それが一番の魅力かなと思います。

原委員 私もボランティアとして、例えばポイントガイドでゾウの前でしたら、ゾウは1日にどれだけの量のふんをするのかというお話から興味を引くわけです。それで、これだけのふんを出すにはどれだけのえさを食べているのだろうという質問を投げかけながらみんなで考えてもらう。そこから、実際に自然の中のゾウが草を食べるには18時間必要なのだという事と、緑にしても木にしてもそれだけ大きな面積が必要なのだという事を解説したいという気持ちがありますし、機会があればそういうことをしています。

ただ、珍しいものを見て興味を引くというところで終わってしまうことがあるのです。今、科学館の方には、1日に自然が何平米ずつ減っているかというものもあるのですけれども、そういう材料がありながら、そこをうまく結びつけるということはすごく大変なのです。ですから、その辺でもう少し結びつけやすい材料があって、解説しやすい工夫がうまくできればいいのだろうと思いますが、今、笠委員がおっしゃったように、ボランティアの中で、もっとそういう形で啓蒙できたらよりいいのだろうなと感じます。

山本委員 私は、自分のペースでどんどん選択して見ていきたいと思うので、子どもさんは今のようなすごくヒューマンな方がいいと思うし、興味を持ったところにみんなで出かけていくというのはいいと思います。

それで、この前、上野の博物館に行ったときにすごくいいと思ったのですが、500円で、簡単に30分くらいで回れるショートコースの音声解説がありました。ああいう音声とビジュアルがあつたら物すごくいいなと思ったのです。そこだけに頼る気はないのですけれども、選択肢としてああいうものがあるのもいいと思います。どうしてもボランティアの方がいない時間だってあるわけだから、ああいうものも駆使して、それは収入源にもなりますね。プログラムが幾つかあるといいなと思います。

服部委員 私は、動物園の中では、情報ツールは子どもが飛びつくのではないかと見えていますので、情報ツールを活用していくということは大変大事なことだと思います。

でも、基本は動物そのものですから、その動物が環境の中でどういうふうに生きているのかを見せ得る一番の見せどころは、食べるころだと思います。食べている姿をどういふふうに見せるかです。えさを与えているのは、食べている状況ではなくて、与えられている状況です。そうではなくて、食べる生態をしっかりと見せていくということです。

私は第2回目のときにお話ししましたが、環境エンリッチメントが大変重要になると思いますので、環境エンリッチメントのプロジェクトチームを組織の中できちっとつくて、一つ一つの動物の環境エンリッチメントを高めていくという手法をつくっていくべきだと思います。動物園は動物を見るのがテーマですから、そのサブとしていろいろな情報ツールをつくる。さらには、小宮委員がおっしゃったように、掲示板をしっかりと蓄えていくということです。そういうものを整備していくのは大変大事だと思います。

円山動物園へ来て、楽しい中で環境教育がおのずとなされて帰った、これが大事だと思います。円山動物園として、最終的にはレクリエーションがあるわけですから、楽しい動物園という姿を描けるように、動物園全体でそれをつくり上げていくべきだろうと思っています。

高木委員 本物を見てわからないものがいっぱいあると思います。例えば、それぞれの生態とか、間近に見たときの大きさとか、例えば旭山動物園で、ライオンがガラスの向こうでうわっとやりますね。でも、うわ、すごいだけで終わってしまうのです。しかし、あの後にきばを見せると、落とし込みが全然違うのです。

僕が言っているプログラムというのはそういうことで、一緒に見てきた後に、例えばこの犬歯で肉を切り裂くのだよという説明は、だれかが間に入らないと見えるようにならないのです。そういうものを開発していくには、よく見ている方と、それをプログラム化する方が一緒になって開発しないとできないと思います。そういうプロジェクトチームやワークショップのチームがあると、いろいろなプログラムの開発ができると思います。

さっきの話は、大道具さんが入ったからすごいことになったのです。僕がそれを聞いたときに、なぜおれたちは気がつかなかったのかと思ったのですけれども、それは舞台装置をやっている人がいたからなのです。

ですから、プログラム開発をするときに、違う分野の人が一緒にいながら話をしていけないと、新しい見せ方ができないと思います。もちろん、サインが大切だと思いますけれども、それだけでは見えないものがいっぱいあると思うのです。

先ほどバクのおしっこの話を聞いたのですけれども、私はおしっこの中に1円玉を入れたいなと思ったのです。本当に溶けるのかと。僕は、その手の発想しかできませんでしたけれども、そういうことをやっているほかの人たちと話していくと、いろいろな見せ方が出てくると思います。科学者の方が入ったらまたちょっと違うかもしれません。

そういうプログラムが細かく開発されていくというのは、おもしろさがあると思います。もちろん、本物を見た後のもう一つの落とし込みみたいなものが環境教育のプログラム、動物園のプログラムとしてあるのではないかと思います。

服部委員 とても大事なことであって、まさにそこはプロジェクトチームを立ち上げていくべきだろうと思います。

1回目のときに、動物園の裏方をずっと歩きましたが、トラがすごい勢いで吠えましたね。あれはわざとやってくれたのだろうと、なかなか心配りがいいなと思いましたが、やはり、ああいう見せ方はいいと思います。トラの鳴き声はこんなにすごいのかということをおもは私どもは勉強させられたけれども、勉強というよりも、むしろ驚きと感動なのです。そういうものを入園者にタイムリーな姿で見せていくと。

先ほど食べるという話をしましたが、動物に食べさせるというのは無理なことで、動物園としてやるべきことではないと思いますけれども、その類似行為は工夫すれば幾らでもできるのではないかと思うのです。そういう見せ方ですね。エンリッチメントというのは、それから見せ方につながってくるのだろうと思います。環境教育だけでとらえてしまおうとかたいものになってしまいますが、それらが体系的にでき上がっていけば、おのずと環境教育が学ばれて、楽しかった、感動したというものが描かれていくのかなと思います。

高木委員 環境教育というのは、どうもかたいイメージが先行してしまうのです。それは、僕がいる世界にもずっとありまして、それをいかにやわらかく、楽しみながら伝えていくか。例えば、ヒグマと人のかかわり方も、その地域の人にとっては大変なものなのだけれども、高校生2年生の男の子が、最後に「せつねえな」と言ったのです。それは、別にクマを殺すのはやめましょうという落とし込みをするわけではないですけれども、今まではクマは怖いもので、獰猛だという印象の中に、クマが撃たれるのは切ないなという落とし込みができたのです。

それはなぜかということ、先ほどの話の続きになりますが、いろいろな生態を見せて、骨格と毛皮を見せた後に、撃たれたときの散弾銃の球を見せるのです。それを1個見せるだけで、高校生の中にはイメージがぱっと広がるのです。そのときに、人とヒグマの関係を僕らはどう考えるのかということに落ちるのです。

ですから、もっとソフトな感じといいますか、かたいイメージではないもの、楽しいもの、そういうものを私はプログラムと言っているのです。それを開発していく必要があると思います。

服部委員 人と動物のかかわりの中に、おのずと環境という問題があらわれてくる、そういうプログラムをつくっていくべきだと思います。人と動物がかかわる、触れ合うとなると、どっちにしろえさをやるしかない、どうやって食べさせるかということしかないと思います。ですから、この辺の手法を、環境エンリッチメントの立場からもう少しプログラム化していくべきだと思います。

原田委員長 私は思うのですけれども、動物園というのはコンクリートを敷いています。動物はふんをしますから、土よりもコンクリートの方が洗いやすい、そればかりではないかと思いますが、そういう考えでコンクリートとおりという形になったのではないかと思います。しかし、動物は生きているということをもうちょっと知る必要があるのではない

かだと思います。そうじゃないと、共生とか共存と言われても、どうしていいかわからないわけです。生き物というのは、どうやって自然の中で生き延びているのかということをもう少し目で見ると、さわってみる、とってみる、そういう環境がないと、幾ら環境の生態的な循環モデルが書かれていても、何も実感しないのではないかと思います。

今、たまたま円山動物園にはそういう自然環境が備わっています。あの原始林とか、東側の円山川の斜面とか、あの辺で生きている生物は一体何なのか、だれもあそこにおいていないのでわからないわけです。今、あの辺でヘビを繁殖させているというわさも聞いておりますが、そのヘビは一体何を食べているのか。聞くところによると、カナヘビを食べているそうですが、では、その数はちゃんといるのか、数がいないのだったら何を食べて生き延びているのか。ほら、ここにこれがあるだろう、これを食べているのだよ。では、それは一体何を食べているのか。そのえさになるものは何を食べているのか。ほら、ここにザリガニがいるじゃないかと。そういう連鎖でいっているわけで、そういう生態系のシステムに触れられる環境があるのだから、それを教えるのが動物園の任務だろうと私は思っています。

そういう緑があるだけではなくて、今必要なのは動物がいる緑なのだ。植栽としての緑というのは、見た目はきれいかもしれないけれども、本当の意味で人間が生き延びるためのものではない。逆に言えば、ちょうど円山エリアはそういう自然環境があって、もともとユースホステルがあったあたりの森などは余り手が入っていないようです。そういう手が入っていないところで生物がどのように生息しているのか、どういう循環をしているのか。あそこも水があるようですが、土と緑と水と生き物が備わっている環境に触れることによって、こうやって生きているのだという実感がわくのではないかと思います。

先ほど園長が言われたように、動物園はそういうものを繁殖させる場であり、環境であるということをしっかり勉強させて、繁殖とはこのようにして行う、そのためにはこのような条件を整える必要があるということをつたき込む必要があると思います。私も、こう言っているが、たたく込まれていないのでわかっていないわけです。そこでの余剰としての生き物が川伝いに円山公園の方に流れて行って、そこは園外で普通の公園ですから、子どもたちは必死になってとる、そういう環境づくりが大切だと思います。子どもたちが自由に自然環境と触れ合って、生き物も取得し、そこで川に落ちてずぶぬれになって、自然というのはそう甘いものではないと知る、それが触れ合うということだと思います。

そういう環境が目の前にあるので、それを生かした自然観察であれ、触れ合いのゾーンであれ、そういうものを動物園がつくって提供する、それを運営するといった仕組みが必要なのではないかと思います。

ですから、環境教育というのは、頭で考えてもなかなかできないので、やはり現場に行き、こういう連鎖になっているという事実を子どもたちに触れ合わせて教える、それをプログラム化していくことが大切だと思います。それはカリキュラムですね。やはり動物園はいろいろなカリキュラムを用意していく必要があると思います。

それから、それをフォローするための電子情報も提供する。先ほど博物館でレシーバーが貸し出されているという話もありましたけれども、そういうデジタルコンテンツを含めた形ですね。それは多分有料になると思いますけれども、そういう補助教材も含めて、動物園は開発をしなければならない。

ですから、円山動物園が初めて、現場体験をし、映像で補助教材も供給し、プリント教材もつくり出し、環境を提供する一つのモデル動物園となる、私はやるのならそこまでやるべきだと思います。日本の中で、上野動物園なり円山動物園なりが一つのモデルとして、環境教育とはこのように実態体験を伴って行うのだというモデルをつくっていくことが任務としてあるのではないかと考えています。

ですから、昆虫だけとか、魚だけとか、ヘビだけということではなくて、その生息環境全域で 全域と言うと変ですが、あるところを囲ってでもいいから、そういう触れ合いのゾーンをつくるといいのではないかと考えています。今、円山にはそういうところがないので、ああいう斜面のあたりや、ユースホステルがあったあたりを、あそこは小学校が自然観察として活用しているゾーンだと前にお聞きしましたので、動物園が手をかして、もっと学習できるような、学ぶことができるような環境に少し手を加えて、子どもたちのためにつくっていくということが必要なのではないかと私は思います。

エンリッチメントについては、まだ余り突っ込んだ意見が出てこないように思いますけれども、ちょっと置いておいて、種の保存についてはどうでしょうか。

種の保存がなぜ叫ばれているかということ、人間が自然環境に対して手を入れてきたから、そこを住居地区にしたり、工場地区にしたりして、ある意味ではどんどん自然を破壊してきた。それは、人間のために有効利用してそこに従来からすんでいる生物は絶えられなくて死滅してしまう、そのようにして世界的に種がどんどん減ってきている趨勢にあるわけです。もう一つは、自然の山、森、水系に対して人間が手を引いてしまったから、なかなか動物がすめなくなった。例えば、山が荒れた結果、果樹園や野菜畑にクマが出てきたり、イノシシが出てきたり、シカが出てきたりしているけれども、それは山にすめなくなってきているからです。自然の環境にすむ種がだんだん減ってきたという二つの方向があるのではないかと考えています。そういう方向に対して、種の保存という積極的な手を差し延べていこうというのが世界的な趨勢だと思います。

日本のトキは絶滅してしまったわけですが、そういうふうに、とにかく放っておいたらどんどん種は減っていく、それをどうやって保存し再生していくのか、あるいは持続させていくのかという手を考えていく、方法を考えていく、再生環境をつくり出していく、これも動物園の一つの任務として考えられるのではないかと私は思っています。

全くど素人なので、それはおまえが勝手に思っているだけだと思われるかもしれませんが、大体どの動物園関係の本にも種の保存ということが出てくるわけです。しかし、はっきりこうやれば種を保存できるということはどこにも書いていません。非常にトライアルで、ここではこういう例があるくらいの紹介しかないのでありますが、私は、円山動物園

でも何かそういう仕掛けをする必要があると思います。先ほどのオオムラサキも一つの事例になると思いますけれども、どんどん繁殖させていって、その繁殖の方法等を周りに示して、そういうやり方でオオムラサキがあたり一面に飛んでいるような環境に再生していく、そういうことは動物園として取り組むべきプログラムではないかと思っています。

ただ、私の知識は余りないので、ここに出されたオオワシとかオオムラサキという非常に断続的な個々の動物しかわかりませんが、そこには何かの連鎖があって、こういう植物を食べる、その植物が生えやすい環境はこのような条件下でつくられている、そういうルールがあると思いますけれども、その辺の仕組みを動物園が作り出していくということが必要だと思います。

この種の保存についてはどうでしょうか。

これは、産学官連携とも絡んでいると思います。全くお金をかけないということもありますが、少しはお金をかけてという種の保存の仕方もあるのではないかと思います。

ちょうど、種の保存のウに研究活動の推進というものがあって、さっき語られた、本当に動物を研究する人が動物園に入っていないかという問題にも関係してくるところでもあります。私は、種の保存というのは、動物園の非常に重要な任務なのではないかと思っています。ですから、これをなぜ動物園がやらなければいけないのか、なぜ動物園ならやれるのか、なぜ種の保存の仕組みを人間が知らなければいけないのかということについて、動物園はもっとアピールすべきだと思います。

これに関して、反対の意見なり別の意見なりがございましたら、どうぞご発言いただきたいと思います。

服部委員 大変大事なことをご提案いただいたと思いますが、もっとわかりやすく言えば、札幌市の鳥は何ですか。

金澤園長 カッコウです。

服部委員 昔はその鳴き声を聞いていたのですが、今はほとんど聞けなくなってしまいました。そういう意味では、市民、地域を巻き込んで、札幌市全域でカッコウの声を聞く運動をする。種の保存という位置づけも含めて、環境という問題も含めて、札幌市の鳥をふやそうではないかというプロジェクトを、これは種の保存が大きなテーマになってくるでしょうけれども、そこに産学官・市民が連携した運動母体をつくっていくというのは、今、委員長がおっしゃった裏づけの一つとして描かれていくのではないかと思います。

カッコウについては、札幌に生まれ育っている人は、今日まで長く生きている人は、昔は家の近くで鳴いていたのを聞いていたと思いますが、今はほとんど聞けません。では、この声を聞こうではないかということで、もう一度、札幌の鳥のあり方というか、環境のあり方をほうふつさせるようなプログラムを組めないかなと思っています。

笠委員 カッコウは、自分で子育てをしないから、種の保存としては余りふさわしくないのかなという気がします。よその巣に卵を産んで、自分では育てないという性質がありますから、種の保存という面ではどうかなと思います。

服部委員 ただ、札幌市の市鳥としてはかえられないわけでしょうから、これは大事にしていかなければいけないと思います。そういう意味で種の保存だろうと思います。

高木委員 種の保存は何らかの形ではすべきだと思います。どの動物をするかは別ですけども、オオムラサキがいっぱい飛んでいたら、環境省はノーと言います。だから、何がいいかという議論は置いておいて、特徴的な種は何らかの形で保存して、それは研究をしていかなければいけないと思います。ただ、ここで何の動物がいいかとなると、それぞれがかかわることになると思いますので……。

服部委員 それは、一つの例として飛びつきやすいというか、市民を巻き込んで環境教育という描き方をしたときには、札幌市の鳥の存在をもう一回環境を通しながら学んでいくということが必要ではないかと思います。そういう意味で、カッコウというのは格好のえさだと思ったのです。

小宮委員 あとは、種の保存の仕事は、実際は円山動物園を含めて国際的に進んでいます。それは何かというと、140種くらいの動物が国際登録されていて、例えば円山のトラは、ライプチヒの動物園のコンピューターに番号がついて入っています。そういう世界の中でこの動物をふやしているのだというアピールが必要だと思います。

それから、国内系統登録というものもあるのです。80種類あって、円山もユキヒョウやワシ類などはやっているのです。円山のコンピューターに日本じゅうのユキヒョウのデータが入っているわけです。

ですから、アのところであれば、そういう仕事をしているということを、これからの話ではなくて、もう既にそういうことは進んでいるということをアピールするのは大事だと思います。

高木委員 ただ、すごくわかりにくいのは、なぜ種の保存が必要かということのを来る人に伝えられないのです。種の保存が大切だということが前面に出ていますけれども、なぜ種の保存や生物多様性が必要なのかとなると、それを伝えるプログラムが余りないのです。ですから、その文言はどこかに入れてほしいと思います。

さっき、バクのおしっこは物すごく酸性が強くてアルミも溶かすという話を聞いて、それは僕にとってはびっくりすることなのですが、それは種の多様性の一つであって、そのおしっこに物すごい物質があるのかもしれないとか、そこから物すごく発想が広がると思うのです。

要するに、種の多様性がなぜ大切かということを手前にアピールしていくためには、何らかのソフトを考えていかないと、一般の市民の人たちはなかなかわからないと思うのです。あるいは、ブラックバスなどが外から入ってきている問題も、だんだん札幌の近辺にも来ていますが、どうしてブラックバスを放してはいけないのだということは、ほとんどの人は関心を持たないわけです。種の保存の観点からノーだと言っても、それは全然つながらない話なわけです。ですから、その概念をどうつくっていくのかというのはプログラムであって、そのプログラム開発というものを円山動物園の大きなテーマにしてほしい

なと思います。それは、大都市にある動物園だからこそです。さっきのカッコウの問題もそうだと思います。

小宮委員 そういう意味では、環境教育と種の保存は表裏一体なのです。本当はこれからは一つの項目にしていった方がいいかもしれませんが、そうすると、ここだけ大きくなってしまふということもあるかもしれません。

服部委員 環境教育というのは大変大事な観点だと思いますし、動物園そのものが環境教育の場であることは間違いのないのですけれども、それをどういうふうに教えて、どういうふうに見せていくかということだけのことだと思います。

原田委員長 その辺はこれから知恵が必要なのでしょうね。今までは、そういう環境が整っていて余りに気にしなかったのですが、環境というのは本当に漠としたもので、なかなかわかりにくいところがあります。

高木委員 行動展示以外に新しい形はないでしょうかね。

服部委員 私は、飼育展示といいですか、えさをやる展示といいですか、そのものずばりがおもしろいと思います。先ほどバクは豆腐を食べるという話を聞きましたが、豆腐一丁をみんなに飼っていただいて、それを食べていただくと。それは、経営的にも助かるわけですからね。

原田委員長 もう一つは、私の動物園という二重の枠がありますが、ここは非常にいいなと思っておりました。これは、私の動物がいる動物園という意味ですね。私のおりに動物園の動物がいるというよりも、私の動物がいる動物園というふうに考えていくのが新しい動物園のあり方ではないかと思います。

といたしますのは、3回目のときに私はそれを主張しているのですが、今、動物を見に行くという考えでいろいろな動物園が企画をしていると思いますけれども、むしろ、私の動物を飼ってくれている動物園という考え方ですね。飼ってもらうためには、やはり、えさ代は払うだろうということで、里親としてのえさ代を払う。例えば集合住宅というのは、一つの敷地を垂直に分けて、100戸くらいが分割してお金を払っているわけですが、それと同じように、1頭の動物に対して200人が里親になる。そうすると、その動物のある面をスライスして、この面については私が面倒を見るという考え方で、1頭の動物を200人の里親が面倒を見るという考え方ですね。そうすると、その里親が寄附した費用で、えさ代であり、環境エンリッチメントのための費用なり、いろいろと賄うことができるわけです。私は、動物のある部分を飼っているわけですから、それに対してえさ代なり飼育費を払うという形で、その動物のある部分をほかの人と共有している。そして、その動物を預かってくれるのが動物園なのだ。そういうふうに考えていくと、私の動物園というのが成り立っていくという考え方です。

ですから、動物を見に行くではなくて、私の動物の面倒を見に行くというような発想にすると、動物とのかかわりや触れ合いが自然発生的に生まれてくると思います。多分、飼い主としての私ですから、かわいがるために動物園に行くと思います。つまり、リピート

というよりも、当然、リピートしなければ私の動物ではなくなってしまうという考え方がです。ですから、動物園の所有物を見に行くという今までの形を、複数所有している私の動物を動物園が預かってくれているというふうに反転させられないかと思うのです。そういうふうに考えていきますと、動物を支えているのは市民であるという考えも成り立ってくるわけです。入場料だけで動物園を費用的に賄うということではなくて、それぞれの里親が賄っている動物が動物園にいるわけですから、それを見に行くときに入場料を払うのでダブるようになりますが、全く関係ない初めて来る人たちは、そこでどの動物の里親になってもらえますかということで新しい里親になっていくという形で、どんどん里親がふえていく。その里親によって支えられている動物園というようなイメージがつけられていくのではないかと私は思うのです。

そういうふうに考えていきますと、先ほどの何とか協会によって動物園が支えられるというような寄附の受け皿もでき上がっていくのではないかと思います。もう一つは、ファミリーレベルでの里親ではなくて、基金という形ですね。そのかわり大口の基金になりますが、寄附金の受け入れ窓口が片方ではつくられていくと。例えば、環境教育を推進するためのプログラムを開発するための基金としてこれだけを寄附しますと。

1年間の無料パスポートは1,000円がいいのか、何円がいいのかということ論議するよりも、私はこの動物に幾ら寄附する、一口で1,000円でもいいのですが、それによってフリーパスを得るという方がよほど意味があるのではないかと私は考えているわけです。

そういう形で、環境教育とは何なのかということを考えるときに、そこに見にくる、あるいは、自分の動物を見がてら、自然との触れ合い、そこでの生物と環境とのかかわりを体験するというサービスが受けられる。そういうふうに考えていくと、里親になった見返りを動物園からいろいろ得られるのではないかと考えています。

いわゆる寄附という形にしてしまうと、どこにお金が行ってしまったのかなという感じがするのですが、この子と里親としての私というはっきりした関係、そのかわり、ファミリーになったよという認証書はかなりバチッとしたものをもらって、年間でどういうサービスが受けられるということもあって、そこではえさやりということも含まれている。ある一定の時間帯で、動物園が提供するえさは自分が寄附したえさ代ですから、それを持って、ある一定の時間に自分がえさを与える権利を持つ。この子については私がえさをやるというようにしていくと、自分が育てているという実感にもなります。育てているという実感ではないかもしれませんが、実際にえさをやるという体験を得るわけですから、その動物とのきずなはどんどん強くなっていくというストーリーですね。

この辺のアイデアや、それはやってはいけないというご意見があれば、ぜひいただきたいと思います。

服部委員 その話は、第1回目か第2回目に皆さんで議論して、パーソナルサポーター制度、あるいはカンパニーサポーター制度をやるべきだという意見が出たと思います。

上野動物園もそうでしょうけれども、どこの動物園へ行っても、えさをやらないでくださいと言われる。あれは、裏を返せば、えさをやればみんな満足して帰るだろうと思います。

実は、この前、上野動物園に行ったときに、裏のモンキーのところは四角くなっていますね。あそこにえさをやるおじいさんがおって、やらないでくださいというふうに注意させていただいたのですが、それでもやりたがっているのです。やはり、やりたいのだったら、今おっしゃったようなサポート制度をしっかりと位置づけて、えさをやる時間帯にえさをやってもらう、これは顧客満足度という観点から見れば、すばらしくアクティブな動きになっていくのではないかと思います。私は、ぜひやるべきだろうと思います。

原田委員長 ここから入らないくださいというのがよくありますね。係員のみとか書いていますけれども、書いてあればあるほど入りたいたいわけですよ。

この前、カバのキーパー通路に入れてもらったら、本当に目の前でカバの口ががばっとあくのを見ましたが、あれは小さい子にとってはすごいショックだと思うのです。それは一回味わったらもう見にこないということではないと思います。ファミリーになったらそういう特典が得られるくらいのサービスを提供しないと、本当に野生生物に触れ合うところまでいかないのではないかと思います。ですから、禁止条項をファミリーには許可するとか、さわらないでというところをさわってもいいよと。安全は完璧に守った上で、危害を絶対受けないという条件のもとで知恵を絞ったらどうかと思っています。

それでは、余り時間がないのですが、もとへ戻りまして、基本構想骨格案（事務局イメージ）というものをごらんいただきたいと思います。

これは、まだご説明いただいていませんでしたね。

金澤園長 実は、次の会場の都合もありますので、簡単にお話をさせていただきます。

事務局として、3回までの議論を受けまして、大体こういうまとめができるだろうということで章立てをしました。中の部分については、今までの会議録を精査しながらもう一回書き込んでいこうと思っています。そういう意味で、こんなポイントを入れていきたいという趣旨でございます。

2の動物園の役割というのは、今まで議論されてきた四つの役割があるでしょうという趣旨です。

3は、札幌市における動物園の役割ということで、今ご議論いただいていたのですが、環境教育の拠点になるというところを持ちながら整理しようかと考えております。

また、基本理念を例示していますが、「人と動物と環境をつなぐ絆をつくる動物園」という形で整理しております。あくまでも基本は、さっき委員長がお話しされたように、私の動物園という趣旨を前面に立てられるような整理にしていこうと考えております。

そして、動物園の役割を受けて、三つの柱として、わたしの動物園へ、生物の多様性、円山エリアという趣旨でまとめたいと思っています。

一応、構想の取り組み期間としては、5年間を集中取り組み期間としようと考えています。当然、施設の改修等を考えたら、とても5年間できるとは思っていませんので、5年間で集中的にできることをやって、理念は継承しつつ次へ持っていこうと。

それで、課題はいろいろ残ってきますので、9の将来課題というところで今回の積み残しを整理していこうと思っております。

また、事業の展開や展示の方法は、今までご議論いただいたものを整理していきたいと思えます。

そして、8番目で、今まであった経営という視点をしっかり入れて、しかも、その経営体制のところには、マネジメントということと職員の運営主体の問題、それから、動物園が構想をつくったとしても、これをしっかりやっていける、それから、経営もしっかり見ていけるようなここでは外部経営委員会としていますが、そういった外部組織を設けることによって、市民の立場から見ていくことができるのかなと思います。

大まかには、こんな作り方をしていこうと思っています。

以上です。

原田委員長 あらましをお話しいただきましたけれども、1番から9番にあるような方向で基本構想の骨格をまとめていきたいという趣旨でございます。

こんなことでよろしいですね。

金澤園長 これは、書き込んでいく中でもう少し表現が変わると思います。

原田委員長 そうだと思います。大ざっぱに、このような枠組みでまとめていくということでございます。環境プログラムというキーワードも入っているようです。

小宮委員、こんなことでよろしいでしょうか。

小宮委員 はい。

原田委員長 ほかの委員の皆様もよろしいでしょうか。

服部委員 大変大事なことですから、この基本理念が何にしても優先するテーマだろうと思います。このスタイルは、まさに企業のイメージで考えると、経営指針につながってくるわけですから、そういう意味では、基本理念となるものが描かれていけば、おのずと定まってきます。最終的には目標が描かれていかなければならないわけですから、目標をどうするのかという設定までしていかなければいけないと思います。この5年の最後には入場者数150万突破、200万突破という大命題を掲げるべきだろうと思います。

そのために、ちょっと抜けているのは、一つの経営の方向性として、マネジメントで大変大事な顧客満足度100%をどう描くかということだろうと思います。いずれにしても、お出でいただく入園者が満足して帰らないことには次のリピートはあり得ませんので、顧客満足度100%を達成するのだという意気込みをこの構想の中にきちっと盛り込んでいくべきではないかと思っております。

原田委員長 ここでは、具体的にどうするかという内容はまだ余り鮮明ではありませんので、どのようにするかというアイデアを含めて報告書はまとめられるであろうと思いま

す。

それで、次はどのような段階を迎えるかといいますと、中間構想案のような形でいろいろとご議論をいただきます。

次回はいつでしたか。

金澤園長 10月26日の木曜日です。

原田委員長 それでは、次回は中間構想案としてご議論いただくということにしたいと思います。

3. 閉 会

原田委員長 それでは、きょうも時間をオーバーしてしまいましたが、いろいろとご意見をいただきまして、ありがとうございました。